

1. 俵野廃寺第2・3次発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、俵野川地域防災対策事業(緊急河川整備)に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて当調査研究センターが行った。俵野廃寺は、京丹後市網野町俵野に所在する白鳳期の古代寺院である。丹後地域で、現在、確認されている寺院は、奈良時代の丹後国分寺跡と俵野廃寺の2か所のみであり、飛鳥時代の寺院としては俵野廃寺のみである。

当事業に伴う俵野廃寺の調査は、平成18年度から実施している。平成18年度には工事対象地内において150㎡の試掘調査を行い、2地点において多量の瓦堆積を確認した^(注1)。平成19年度は、試掘調査の成果を受けて、遺構・遺物を確認した地点に調査区を設定し、調査を実施した(第2次調査)。第2次調査は、平成19年10月17日から平成20年2月8日まで実施した。調査面積は600㎡である。平成20年度は、第3次調査として遺跡範囲の北限に当たる地点で調査を実施した。現地調査は、平成20年4月30日から平成20年6月6日まで実施した。調査面積は100㎡である。現地説明会は、第2次調査時の平成19年1月27日に開催した。

調査は、調査第2課課長補佐兼第3係長石井清司ならびに同調査員村田和弘が担当し、現地調査は村田が担当した。執筆は、主に村田が担当し、一部、調査第1課長兼調査第2課長肥後弘幸が担当した。

調査に際しては、京都府教育委員会ならびに京丹後市教育委員会をはじめとする諸機関ならびに地元の方々に、ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝したい^(注2)。

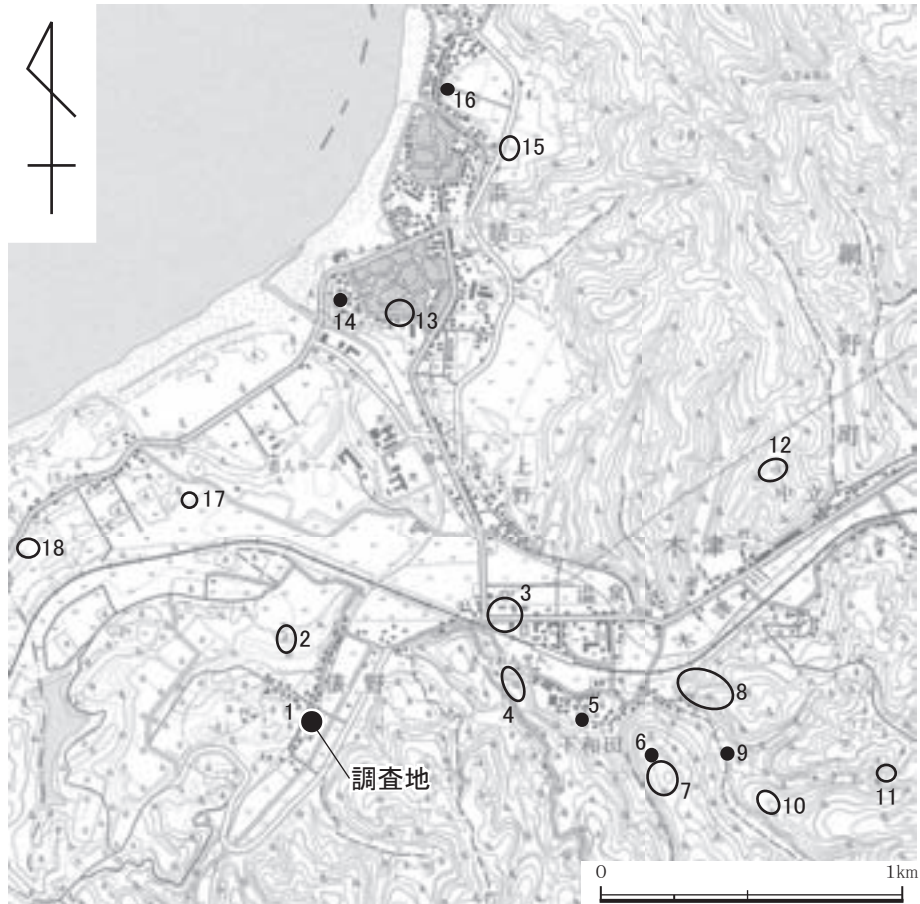
なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 歴史・地理的環境

俵野廃寺が所在する京丹後市網野町は、丹後半島西部に位置し、約17kmにわたって日本海に面している。中心部の網野付近には、北流する福田川に沿って小さな平野部があり、町域西部の木津温泉周辺にも平野部があるが、それ以外は山間地である。

俵野廃寺は、北近畿タンゴ鉄道宮津線丹後木津温泉駅より西へ約700mにある北に開口する幅約150mほどの狭い谷筋の西側丘陵の裾部に立地している。俵野川は、現在は西側丘陵の裾部に沿うように流れているが、大正11年に行われた流路の変更工事前まで、谷の中央部を流れていた。

俵野廃寺の周辺の日本海に面したところでは、昭和32年に発掘調査が行われ縄文時代後期(約3,000~4,000年前)の貝塚や竪穴式住居跡が発見された浜詰遺跡、丘陵上には浜詰古墳群や大泊古墳群・はやし古墳などが存在する。平野部の木津川流域では、縄文時代前期~弥生時代中期、古



1. 俵野廃寺（今回の調査地） 2. 丹ノ谷古墳群 3. 松ヶ崎遺跡
 4. 大森城跡 5. 下和田古墳 6. 女布谷西古墳 7. 下和田B城跡
 8. 下和田A城跡 9. 売布神社経塚 10. 女布谷古墳群 11. 天王山古墳群
 12. 中館城跡 13. 浜詰遺跡 14. 浜詰経塚 15. 浜詰古墳群
 16. はやし古墳 17. 月出遺跡 18. 柴古遺跡

第1図 遺跡分布図(国土地理院S=1/25,000 久美浜)

墳時代～奈良時代の複合集落遺跡である松ヶ崎遺跡、丘陵上には下和田古墳や下和田A・B城跡、大森城跡などが分布している(第1図)。

3. 調査の経緯

(1) 俵野廃寺の発見

俵野廃寺は、大正11年の俵野川流路変更工事の際に発見された寺院跡である。当時、河川の付け替え工事での掘削中に、塔の心礎と思われる礎石と土器、複弁蓮華文軒丸瓦などが採取された。発見された心礎は、「木津村誌」木津村誌編集委員会編(1986年)には、径約1.8m、高さ0.58mを測り、ほぼ円形の自然石の上面を削平し、中央に約径0.15m、深さ0.16mの舍利孔を穿つものであったと記されている。そのほかに、心礎の付近には布目瓦の破片が層になって埋まっていたと瓦が発見された状況が記載されている。さらに、昭和24年頃には、礎石が発見された位置より10mほど北側での護岸工事の際に柱根数本と鬼瓦が発見された。また、昭和58年に俵野川改修護岸

工事が行なわれた際には、暗褐色の地層からほぼ完形の重弧文軒平瓦や布目の平瓦、須恵器などが発見されている。^(注3)

俵野廃寺は、発見された鋸歯文のある複弁蓮華文軒丸瓦、重弧文の軒平瓦、細かい布目痕、格子のタタキ痕などの特徴から、飛鳥・白鳳時代にあたる7世紀後半の丹後地域最古の古代寺院として注目されている遺跡であるが、これまでに発掘調査は行われていなかった。さらに、地名では調査地の周辺の字名に、塔の坪、寺口、寺屋敷、防垣などの寺院を思わせる地名が残っている。また、与謝郡成相寺に伝わる「正徳元年」(1288年)の「丹後国諸庄郷保惣田数帳」には、木津の条下に「一町三段且経寺十八町五段百八十歩同帰院」と記載されており、古くからこの地に寺院があったことが推定されていた。

これまで発掘調査は行なわれていなかったため、伽藍配置や寺域などの詳細については不明である。なお、遺跡地図には寺域の規模は、礎石発見地を中心に100m前後四方と想定され、遺跡範囲として記載されて

^(注4)いる。

(2)調査経過

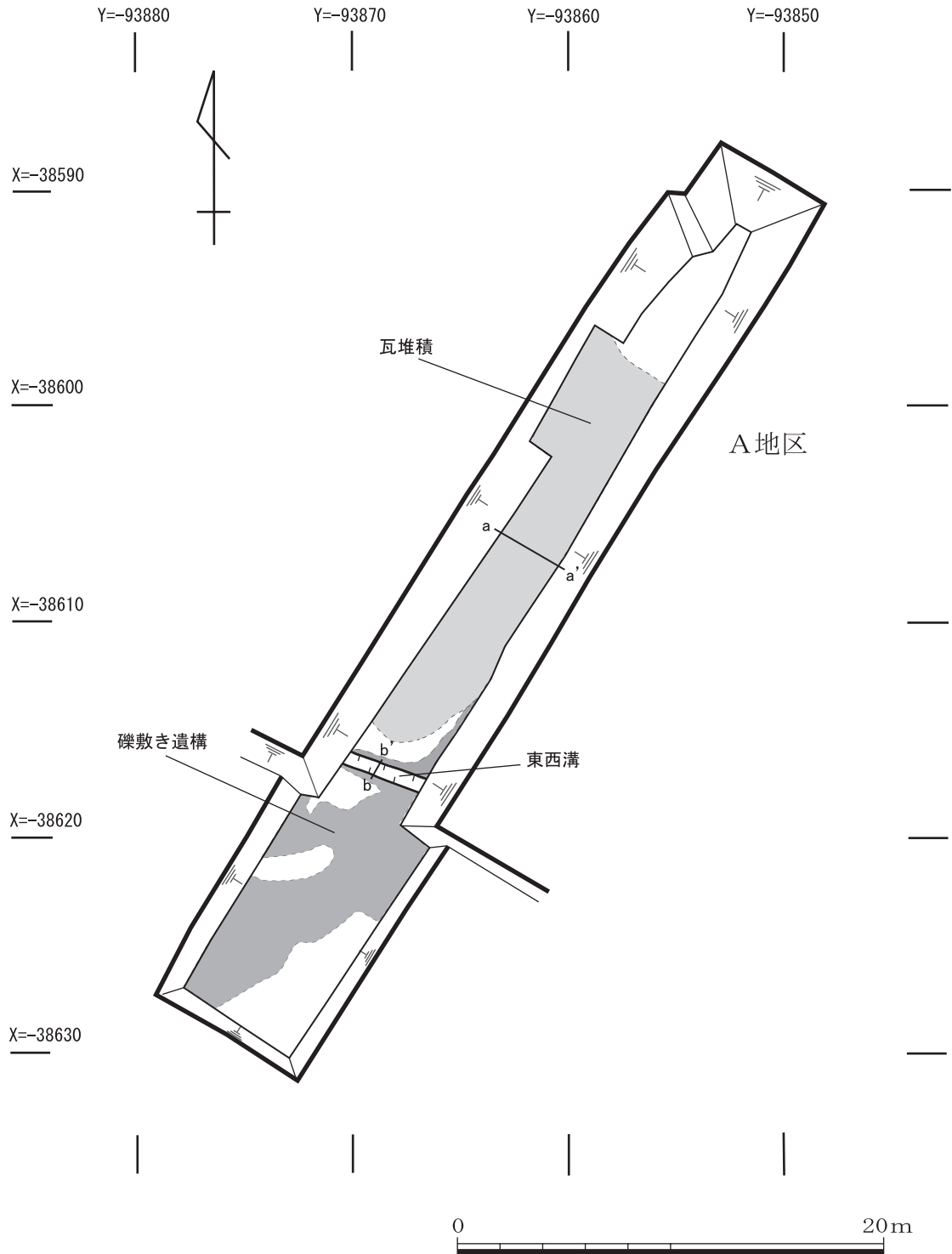
当センターでは、俵野川地域防災対策事業(緊急河川整備)に伴い本格的な調査を平成18年度から3度にわたって実施している。平成18年度の第1次調査は、遺跡の範囲確認と遺構の遺存状態の確認のための試掘調査を実施した。平成19年度には、第2次調査として、遺構を確認した地点を中心に調査区を拡張し調査を実施し、平成20年度に第3次調査を遺跡範囲の北限において実施した(第2図)。

第1次調査は、3か所に試掘トレンチを設定して行った。その結



第2図 調査地周辺地形図

果、北側で設定した試掘①と心礎が発見された付近に設定した試掘②で、多量の瓦が堆積する層をトレンチ全域で検出した。南側に設定した試掘③では、幅約1.5mで、長さ約50mのトレンチを設定し、トレンチの北側において、旧水田の床土直下で拳大の礫層を確認し、上面において瓦の散布を確認した。トレンチの南側は、現地表面から約1.2mまで一部であるが掘削したが、河川の氾濫による粘土と砂の堆積層を確認したのみで、遺構・遺物は確認できなかった。試掘結果



第3図 A地区遺構配置図

を受けて、関係機関との協議のうえ、平成19年度(第2次調査)の調査範囲を決定した。

第2次調査は、多量の瓦堆積を確認した試掘①・②の調査範囲を拡張して実施した。着手順に試掘②を拡張した調査区をA地区、試掘①を拡張した調査区をB地区と呼称し、調査を実施した。

まず、現地表面から遺構が確認できた面の直上まで、重機による掘削を行い、それ以降は人力による掘削作業を行った。A地区では、調査区内の中央部分において、多量の瓦の堆積を確認した。瓦は小片から完形品に近いものまで出土し、少量であるが須恵器・土師器などの土器も出土した。南側では、後世の削平によって部分的に消失していたが、拳大の礫が敷き詰められた状態を広範囲で検出した。B地区では、試掘①を中心とする広範囲で瓦の堆積状況を確認した。東側では、杭が南北方向にならんだ護岸施設と思われる遺構を確認した。

第3次調査は、B地区の北側に隣接して調査区を設定し、C地区として調査を実施した。調査は、第2次調査までと同様に遺構面直上までを重機で掘削し、それ以降は人力で掘削を行った。検出した遺構は、西側で瓦の堆積、東側では南北方向の溝や杭列を検出した。

なお、出土した遺物の整理作業および概要報告作成については、協議のうえ、平成20年度に第2・3次調査の成果をまとめて報告することとなった。

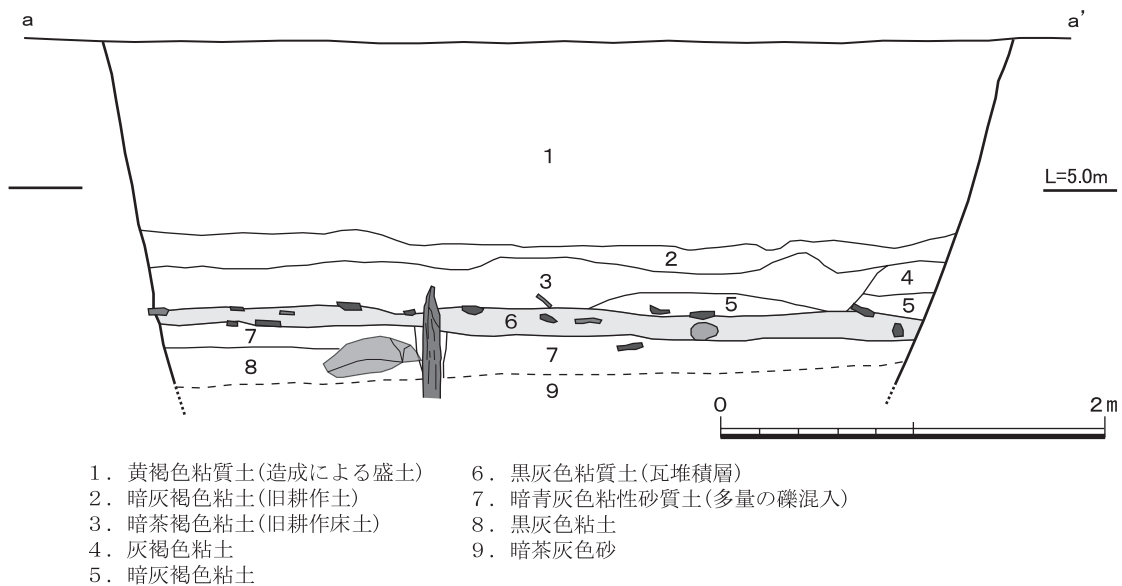
4. 調査概要

(1) 第2次調査

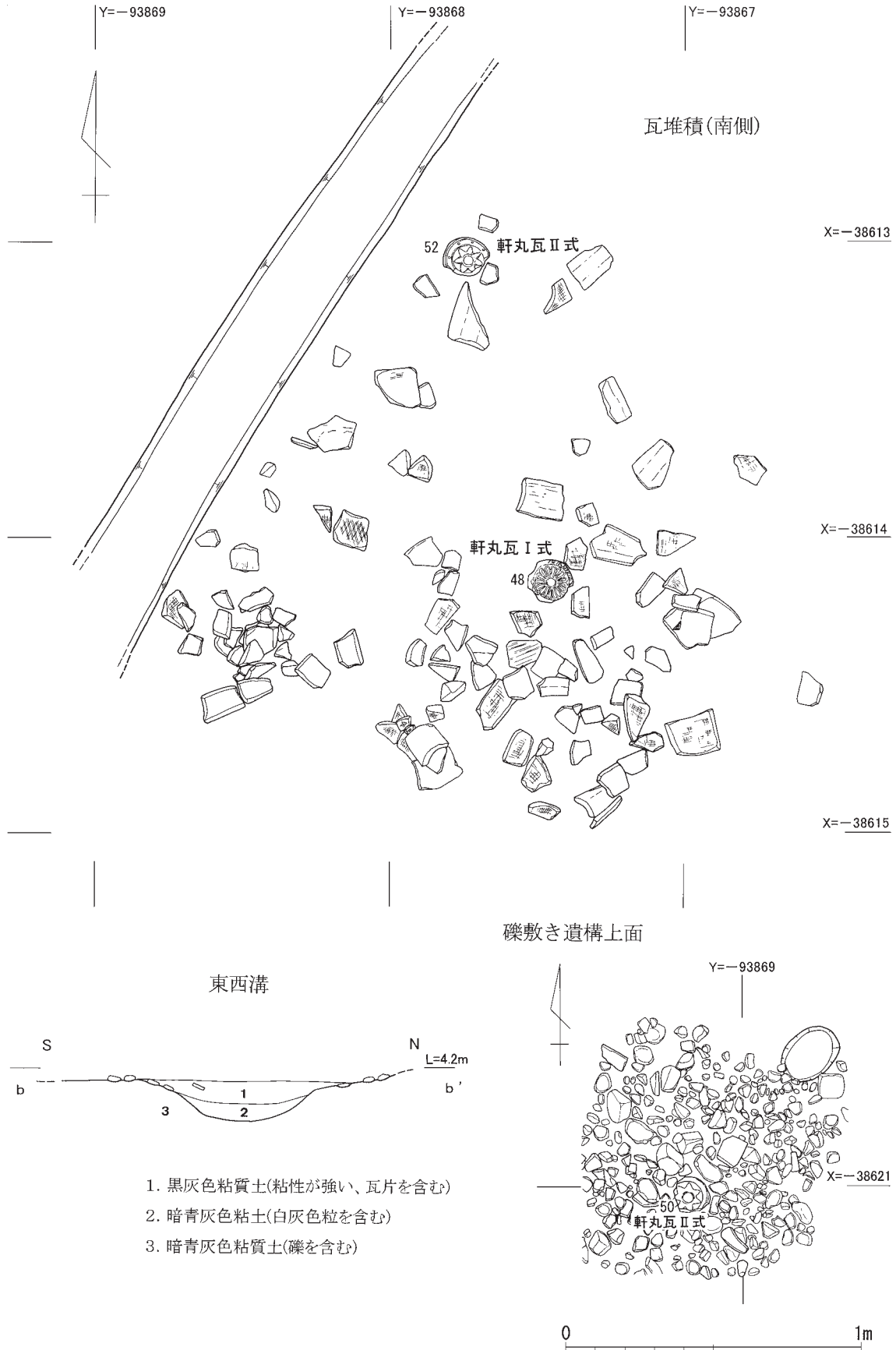
平成19年度の調査は、前年度の試掘調査で瓦堆積を確認した試掘①・②を拡張し、A・B地区として調査を実施した。

① A地区

現地表面より約1.4mの深さで遺構面を確認した。A地区の中央部分において、南北約20mの広範囲で瓦堆積を検出した。また、南側では5～10cmほどの大きさの礫からなる礫敷き遺構を広範囲で検出した(第3・4図)。

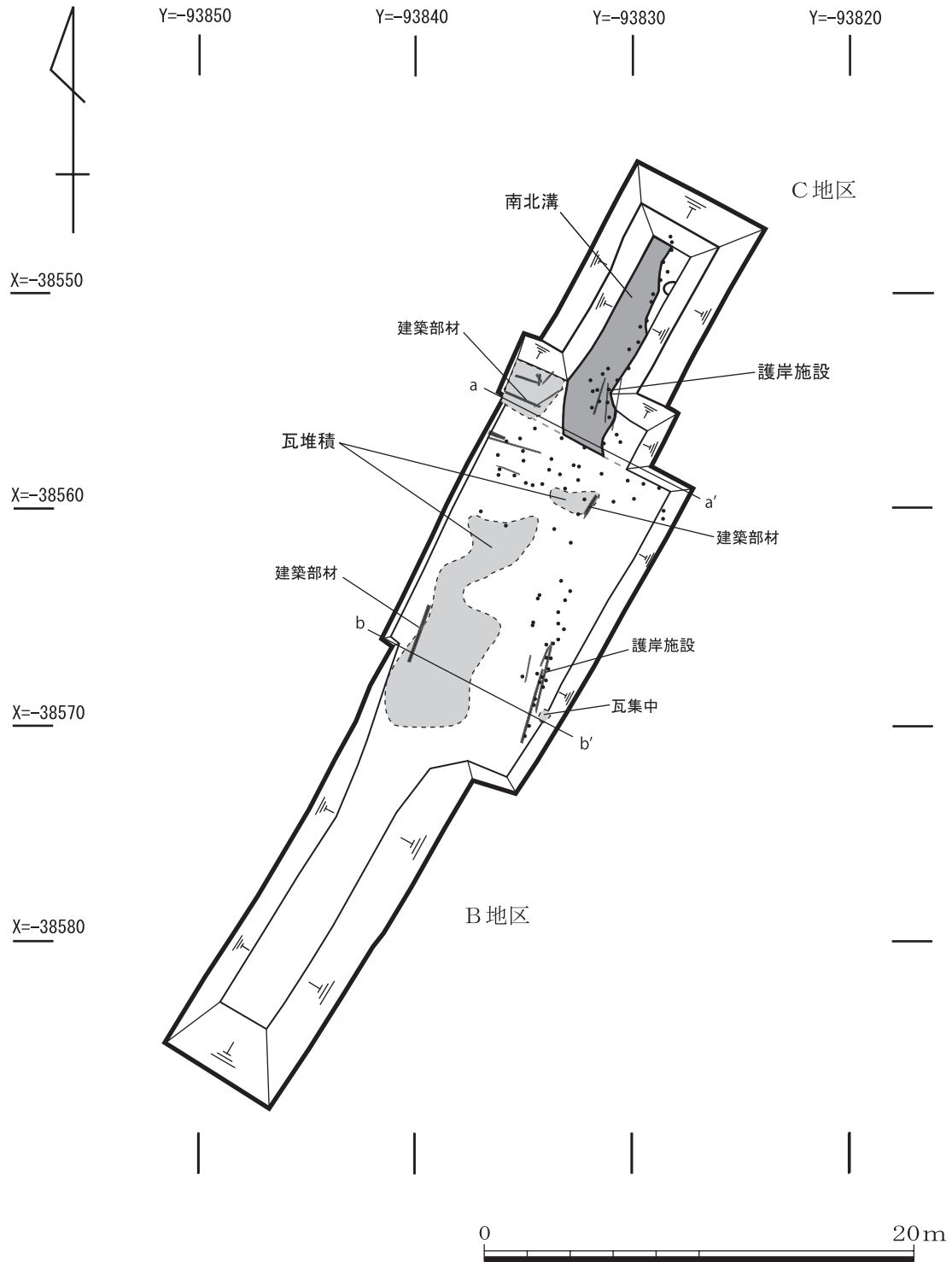


第4図 A地区土層断面図

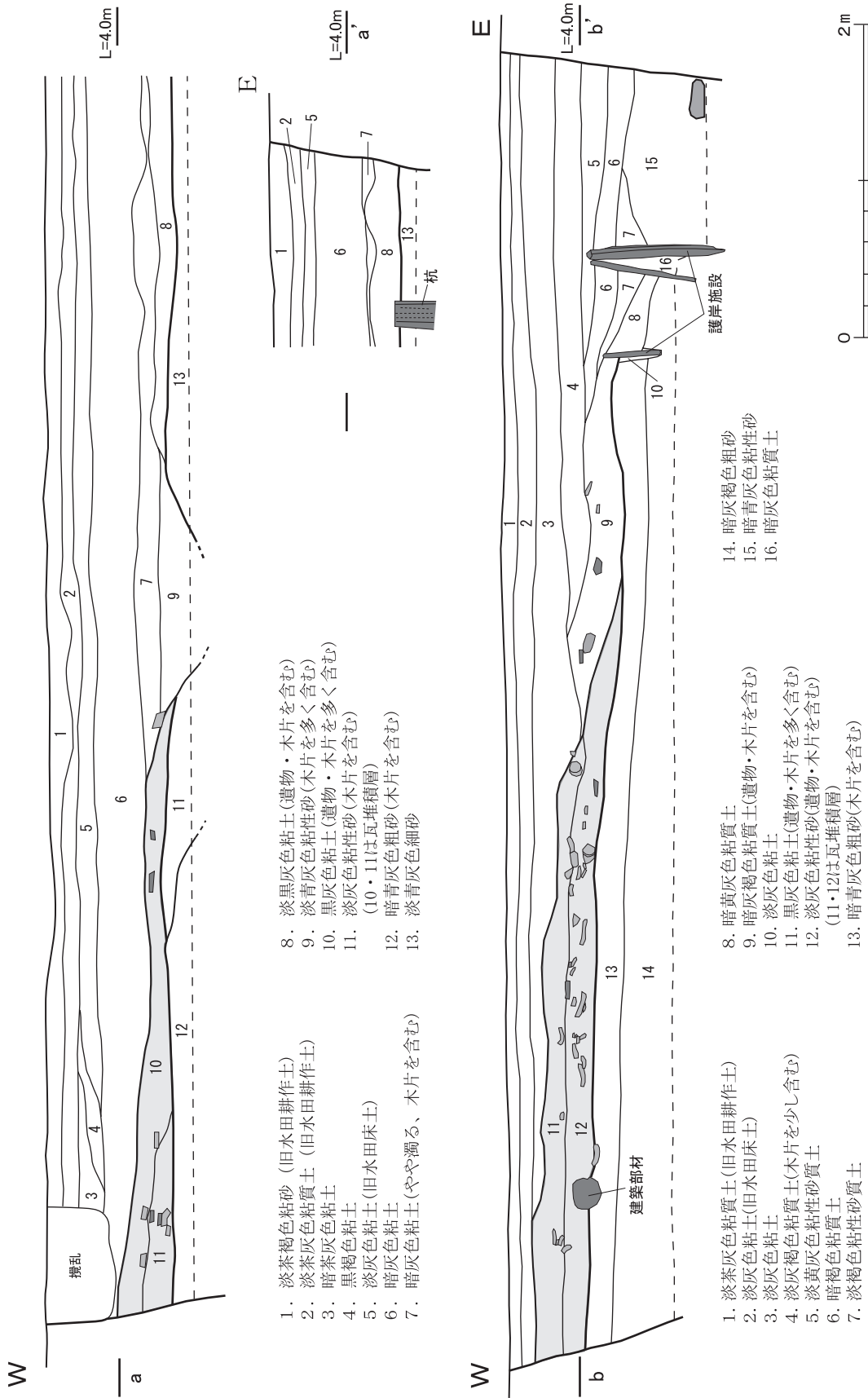


第5図 A地区瓦堆積南側遺物出土状況図(上)・A地区東西溝土層断面図(左下)
A地区礫敷き遺構上面遺物出土状況図(右下)(1/20)

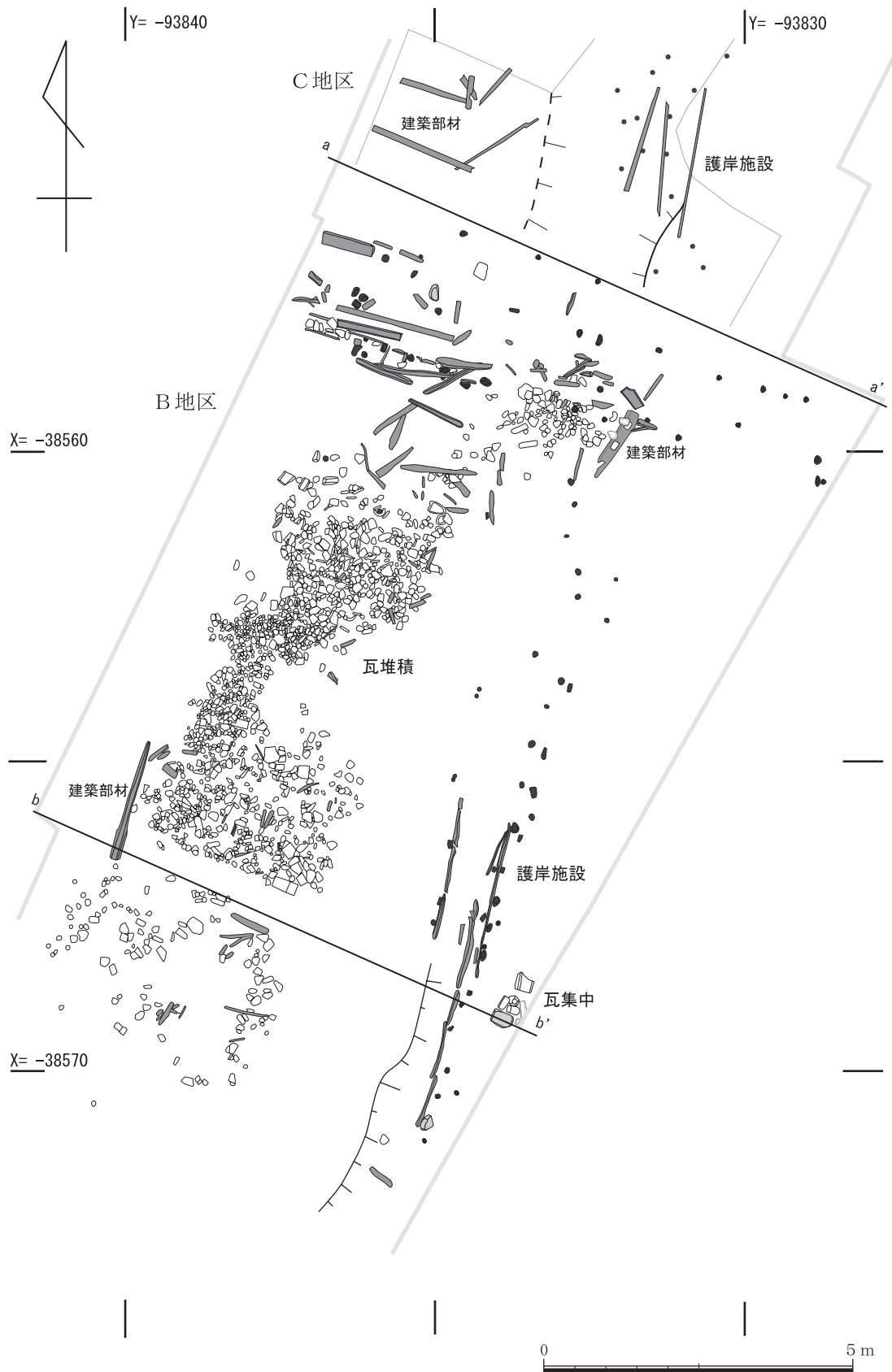
瓦堆積 堆積層の厚さは15~20cmを測り、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦などが出土した。瓦の堆積は、北端から南へ15mほどまでは厚く堆積していたが、南側残りの5mについては疎らに散布されている程度であった。瓦堆積の範囲の南側では、これまでに発見されている複弁蓮華文軒丸瓦(以後、報告上「軒丸瓦Ⅰ式」とする)とは瓦当の文様が異なる七葉の花弁を持つ形式の軒丸瓦(以後、「軒丸瓦Ⅱ式」とする)が出土した(第5図上)。また、若干であるが



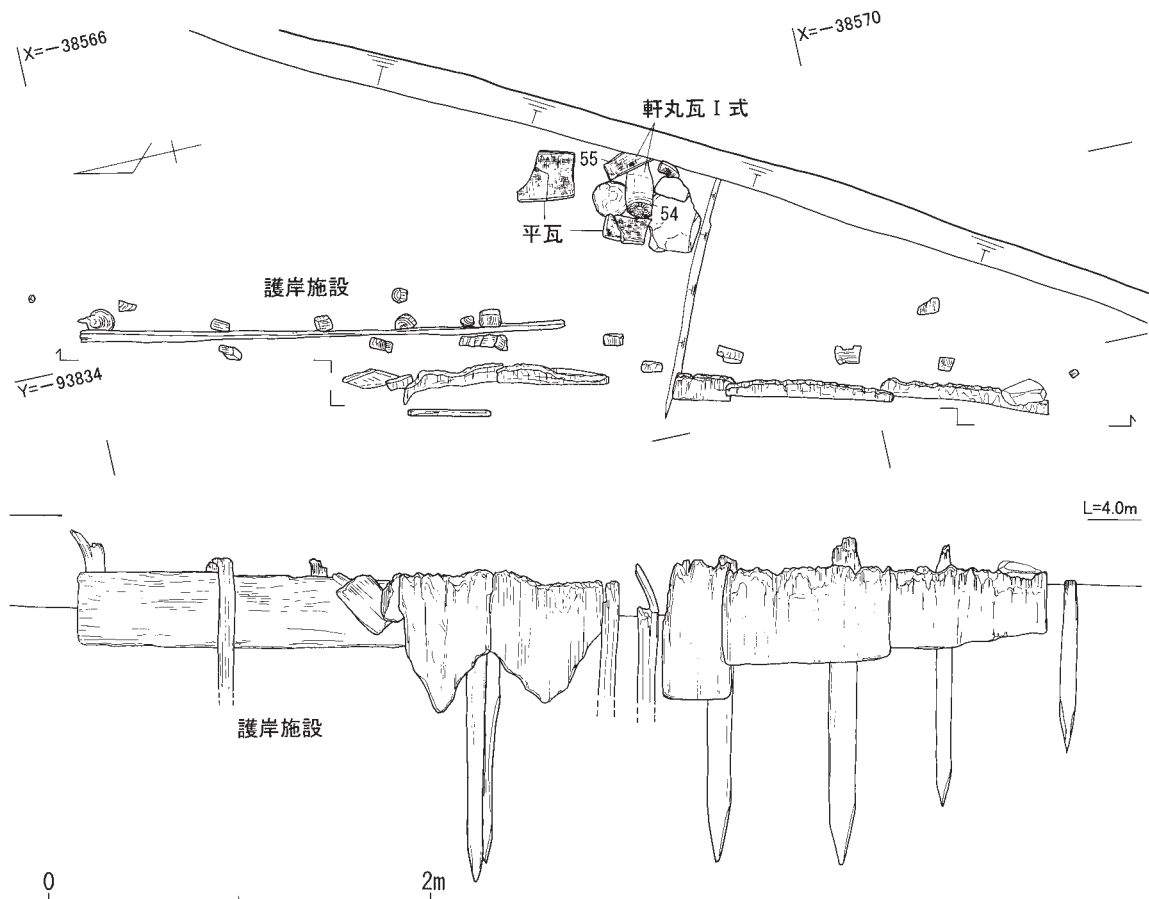
第6図 B・C地区遺構配置図



第7図 B地区土層断面図



第8図 B地区北側遺構配置図



第9図 B地区東側護岸施設実測図

瓦堆積の上層部および上面から平安時代の土器が出土し、瓦堆積の下層部および直下層から飛鳥時代の土器が出土した。

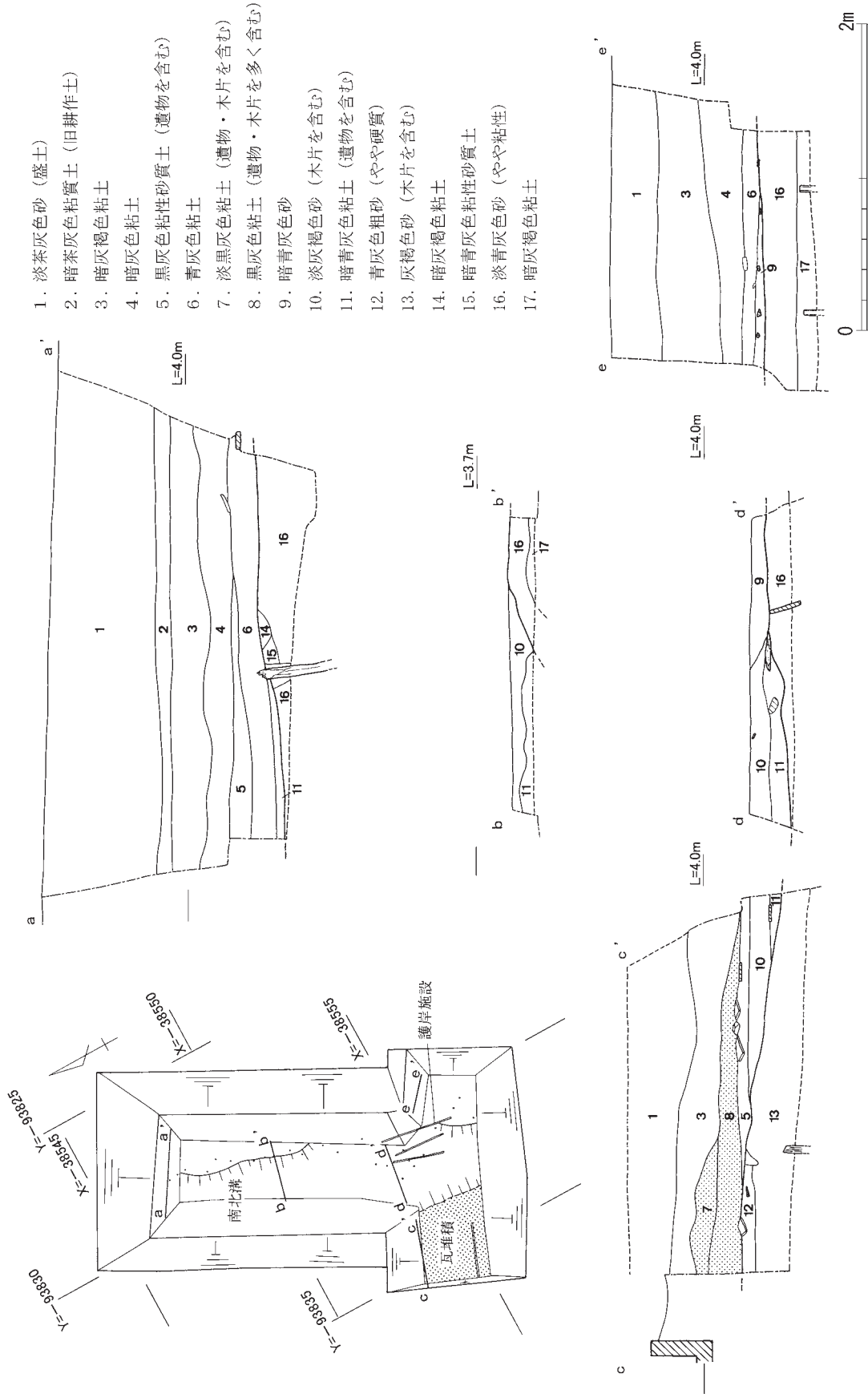
東西溝 幅約0.8m、深さ約0.15mを測る。N110°Eを測る。この溝を境に、北側では瓦堆積が広がり、南側では礫敷きが広がる。溝の埋土の1層には、瓦が多く混じる黒灰色粘質土があり、この層が瓦堆積層と同一のものと考えられる(第5図左下)。これらの状況から、建物域と礫敷きの広場的な空間を区分けする溝であった可能性が考えられる。

礫敷き遺構 調査区の南側で、広範囲にわたって5~10cmほどの大きさの礫が敷き詰められた状態を検出した。礫の上面では、少量ではあるが軒丸瓦Ⅱ式などの瓦や土器の破片が礫に挟まった状態で出土した(第5図右下)。広範囲におよぶ礫敷きは、表面にはほとんど凹凸がなく、平面を意識して敷き詰められている状態であった。一部、礫がない部分は、後世の田畑の開墾等で削平を受け消失したと考えられる。

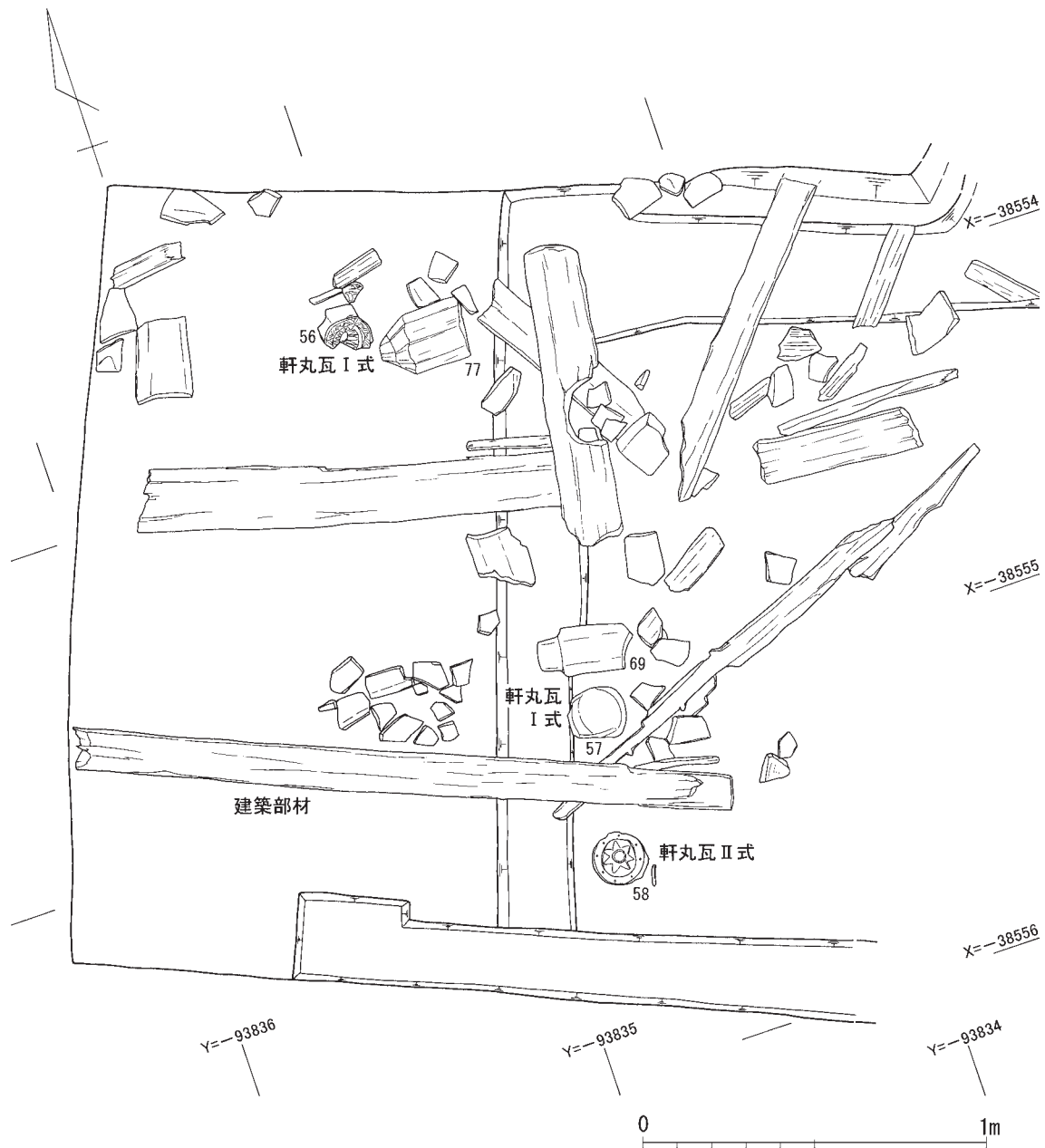
②B地区

現地表面から約0.4~0.6mの深さで遺構面を確認した。B地区の西側半分で、広範囲で瓦の堆積を検出し、東側では南北方向に杭が並ぶ護岸施設と思われる遺構を検出した(第6・7図)。

瓦堆積 瓦の堆積層の厚さは15~30cmを測り、A地区より堆積が厚いが小片が比較的多い。瓦には丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦などがある。軒丸瓦は、軒丸瓦Ⅰ式のみ出土してい



第10図 C地区土層断面図



第11図 C地区遺物出土状況図

る。また、若干であるが瓦堆積の上層部および上面から平安時代の土器が出土、瓦堆積の下層部および直下層から飛鳥時代の土器が出土した。また、建築部材と思われる柱材や木材片が多く出土した(第8図)。

護岸施設 調査区の東側で南北方向の杭列を検出した。一部には横板が残っており、河川からの氾濫を防ぐために設けられた護岸施設と考えられる(第9図)。杭には丸材と角材があり、太さ長さともに不揃いのものであり、そのなかには柄穴が残るものもあり再利用されたものと考えられる。また、横板のなかには矢板のように下部の先端を尖らせたものもあり、当時の護岸の状態が確認できた。さらに、瓦堆積の北側には東西方向にも杭列があり、部分的に板材が残っているところもあったが、瓦堆積の北側と東側は湧水が多く、溝などの遺構は検出できなかった。

この護岸の杭や横板の上に瓦堆積層が被っていることから、寺がまだ存続していた時期か瓦が片づけられる以前に設けられたものと思われる。また、護岸施設の東側の調査区の東端部では、完形に近い軒丸瓦Ⅰ式が2点と平瓦が2点がまとまって出土した。

(2)第3次調査

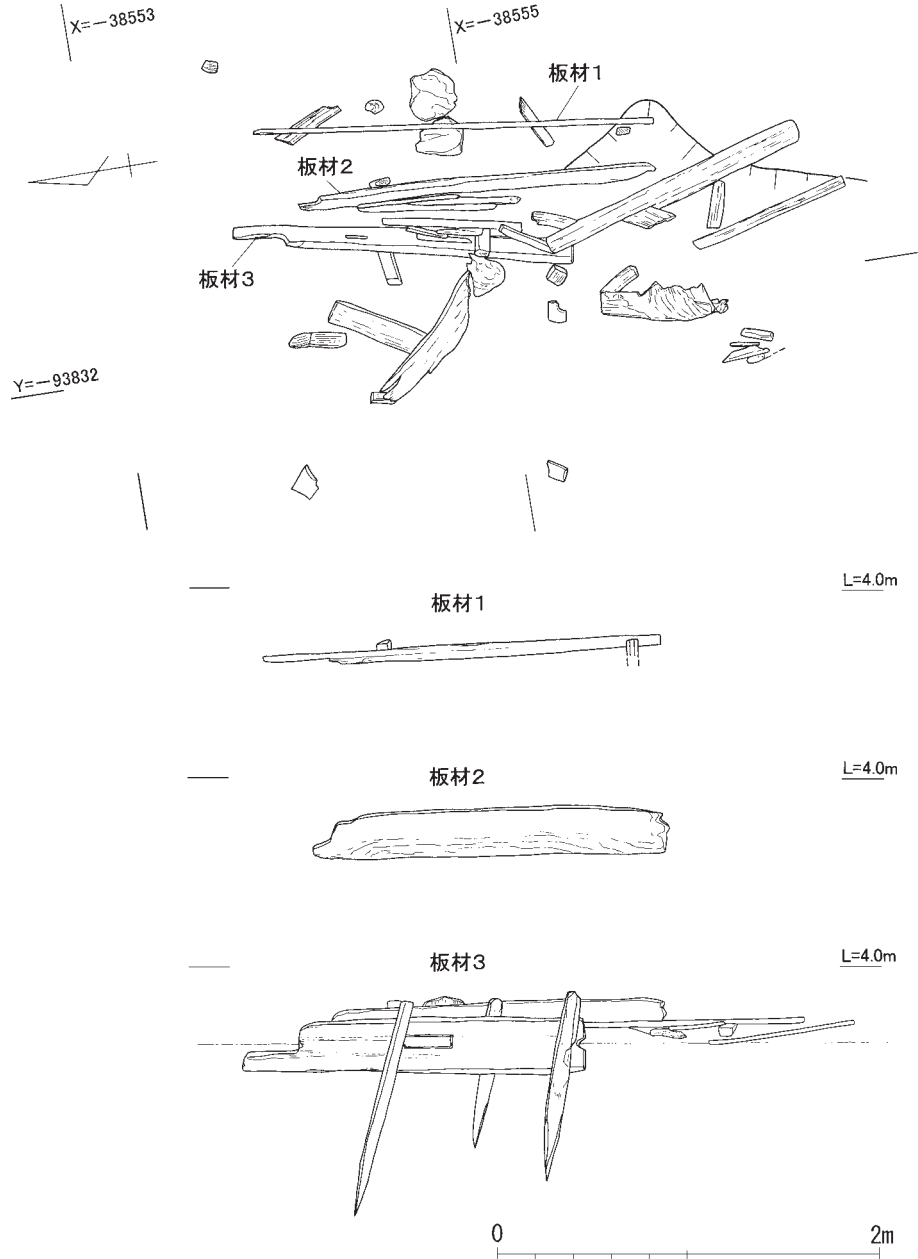
C地区は、遺跡範囲の北限に位置している。調査区は、B地区の北側に隣接して設定した(第6・10図)。

瓦堆積 西側では、瓦や土器などが出土する層を確認した。第2次

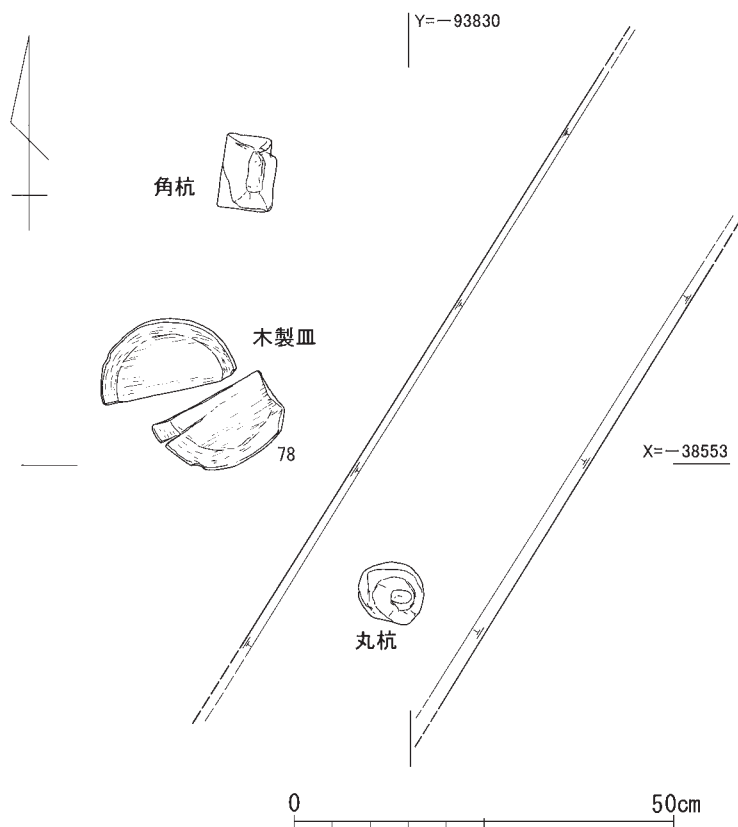
調査の瓦堆積に比べると遺物量は少ないが、瓦や土器のほかに、建築部材を含む木材が出土した。軒丸瓦では軒丸瓦Ⅰ式2点のほかに、軒丸瓦Ⅱ式が1点出土した(第11図)。第2次調査では、A地区の瓦堆積南端部でしか軒丸瓦Ⅱ式は出土していなかった。遺跡北部での出土は唯一である。また、瓦堆積の下層部および直下層から飛鳥時代の土器が出土した。調査区の北半部では、瓦の堆積は確認できなかった。

護岸施設 B地区で検出した南北方向にならぶ護岸施設の北側に延びる延長部分を検出した。杭列は、2列に打たれており、一部分ではあるが横板が残るところがある(第12図)。使われている杭や板材には柄穴が残っており、再利用の可能性が高いと思われる。

南北溝 調査区中央で、杭列の西側で同方向の幅約2.5mの溝を検出した。深さは0.2mを測り、



第12図 C地区東側護岸施設実測図



第13図 C地区南北溝内木製品出土状況図

溝内からは、多くの量の土器が出土した。また、木製の皿が出土した(第13図)。溝の埋土には、木材片が多く含まれており、水が流れて堆積したことがわかる。

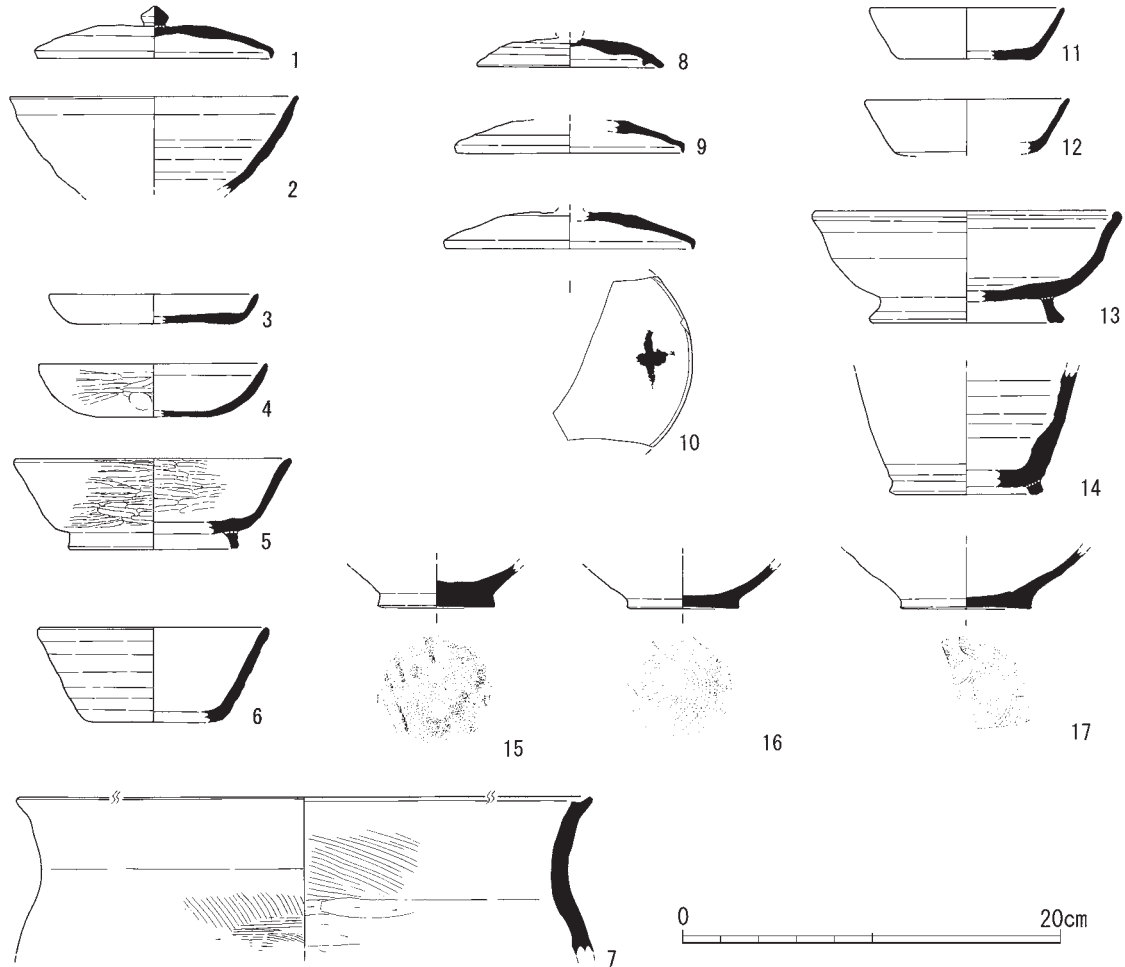
5. 出土遺物

(1) 土器類(第14・15図)

1～17は、第2次調査で出土した土器である。1・2は、A地区で出土した。1は、瓦堆積層(第4図6層)から出土した宝珠形つまみをもつ須恵器の蓋である。2は、礫敷きの上面から出土した須恵器の杯である。3～17は、B地区で出土した土器である。3は、瓦堆積層(第7図断面b11層)から出土した土師器の皿である。4は、瓦堆積層(第7図断面b12層)から出土した土師器の杯である。外面にはミガキ調整がみられる。5は、瓦堆積の上面(第7図断面b11層)で出土した土師器の高台付きの杯である。内外面には、ミガキ調整が施されている。6は、瓦堆積の上面(第7図断面a10層)で出土した須恵質の椀と思われる。胎土はやや軟質であり、色調は黒灰色である。7は、瓦堆積の下部(第7図断面a11層)で出土した土師器の甕で、口縁部から頸部にかけての破片である。8～10は、須恵器の蓋である。8・9は、瓦堆積の下部(第7図断面b11層)で出土した。10は、瓦堆積の北側にある東西方向の杭列の板材付近で出土した。内面には、漆で「十」字の記号が記されている。11・12は、瓦堆積層(第7図断面b12層)から出土した須恵器の杯である。13は、瓦堆積の下層(第7図断面b12層)から出土した高台付きの杯で、口径が15.9cm、器高は5.9cmと大型である。14は、瓦堆積の南辺部で出土した須恵器の壺の底部である。15～17は、瓦堆積の上部(第7図断面b11層)で出土した須恵器の椀で、底部は糸切り高台である。

18～47は、第3次調査で出土した土器である。18～21は、瓦堆積層直下(第10図5層)から出土した須恵器の蓋である。22～28は、瓦堆積の下部および下層(第10図8・12層および5・12層)から出土した須恵器の杯である。29～34は、瓦堆積の下部および下層から出土した高台をもつ須恵器の杯である。35・36は、瓦堆積(第10図8層)から出土した。35は須恵器の椀の口縁部と思われる。36は須恵器の椀で、底部には糸切り痕がある。37は、瓦堆積層(第10図8層)から出土した須恵器の破片で、外面に墨書で「十」字の記号が書かれている。38は、瓦堆積層(第10図7層)から

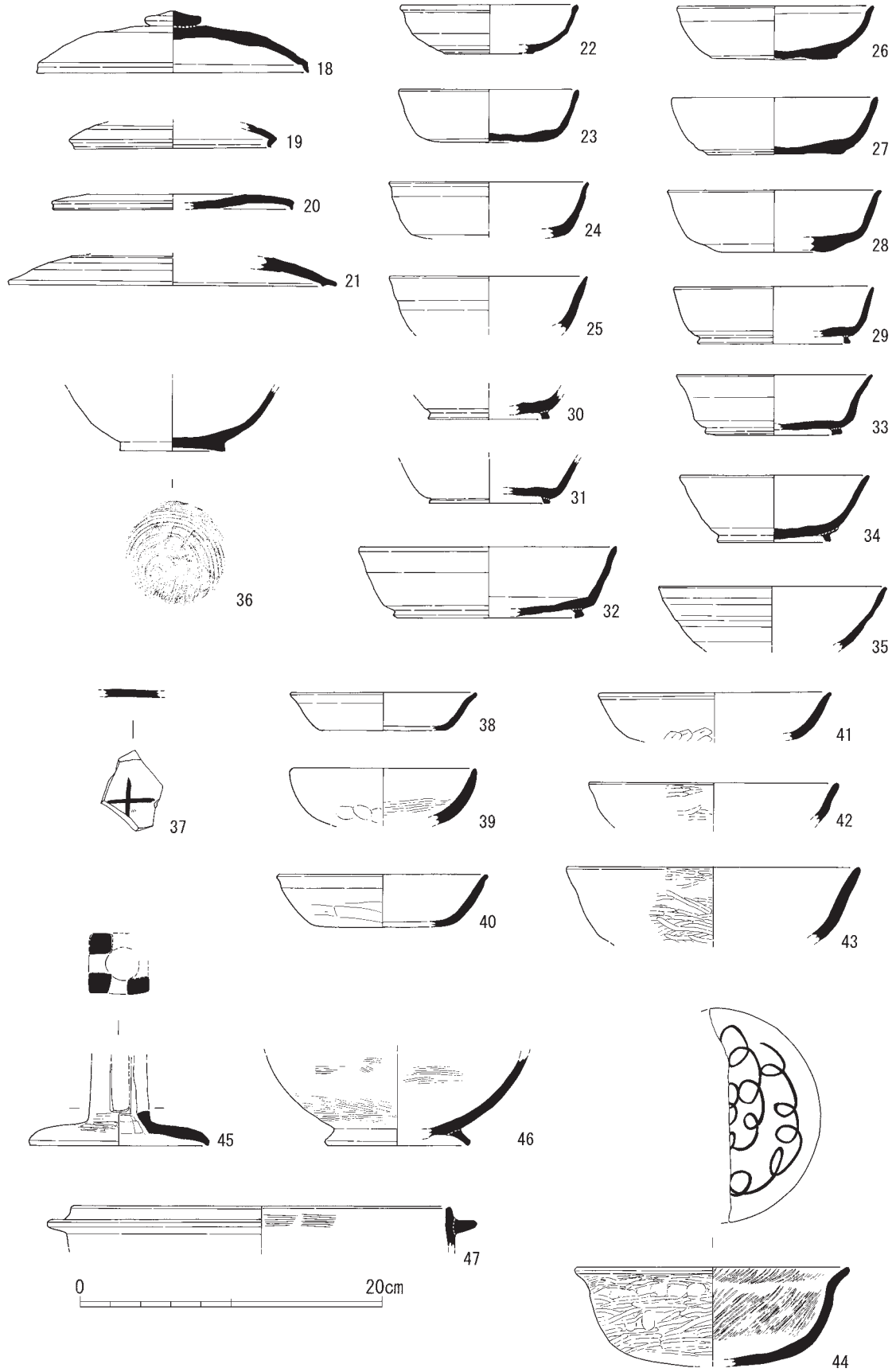
18～47は、第3次調査で出土した土器である。18～21は、瓦堆積層直下(第10図5層)から出土した須恵器の蓋である。22～28は、瓦堆積の下部および下層(第10図8・12層および5・12層)から出土した須恵器の杯である。29～34は、瓦堆積の下部および下層から出土した高台をもつ須恵器の杯である。35・36は、瓦堆積(第10図8層)から出土した。35は須恵器の椀の口縁部と思われる。36は須恵器の椀で、底部には糸切り痕がある。37は、瓦堆積層(第10図8層)から出土した須恵器の破片で、外面に墨書で「十」字の記号が書かれている。38は、瓦堆積層(第10図7層)から



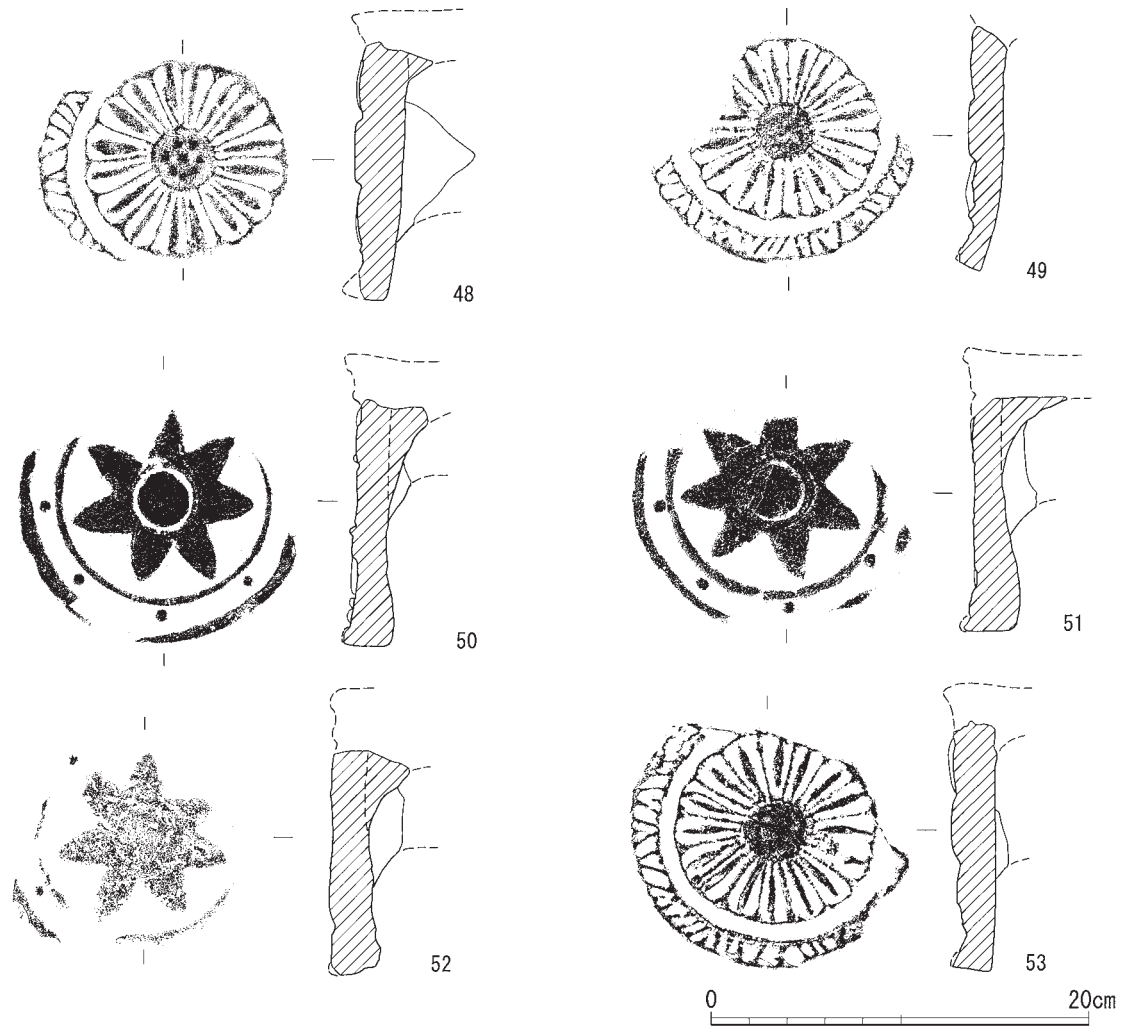
第14図 出土遺物実測図 土器(1)

出土した土師器の皿である。39～42は、瓦堆積層の下部および下層から出土した土師器の杯である。41・42の底部外面にはヘラケズリ後ナデの調整がみられる。43は、南北溝(第10図11層)から出土した土師器の杯の口縁部と思われる。磨滅が著しいがミガキの調整痕がみえる。44は、南北方向の溝の底から出土した土師器の杯である。外面には、横方向のミガキ調整があり、内面には口縁部から底部にかけて放射状暗文、底部には螺旋暗文が施されている。45は、南北溝から出土した土師質の土器で、高杯の脚部と思われる。長方形の透かしが4方向にある。内外面には赤色の顔料が塗られている。46は、南北溝から出土した土師質の壺か鉢と思われるが、底部に高台が付く。この土器の内外面にも、赤色の顔料が塗られている。47は、瓦堆積(第10図7層)の上面で出土した土師器の羽釜の口縁部である。

今回の調査で出土した遺物のなかで、瓦堆積層の下層部や直下層から出土した土器は、寺が存続していた時期を示すものと思われる。この土器群を観察すると、7世紀末から8世紀初めごろにまとまっている。第1次調査で報告した土器で、高台をもつ須恵器杯Bが7世紀後半と、古い要素はあるにしても全体的に考えると寺の造営時期は、若干下る可能性も考えられる。また、瓦堆積の上面や上層で出土した土器は、寺の廃絶あるいは廃絶後の再堆積の時期で、平安時代中期(10世紀代)と思われる。



第15図 出土遺物実測図土器(2)

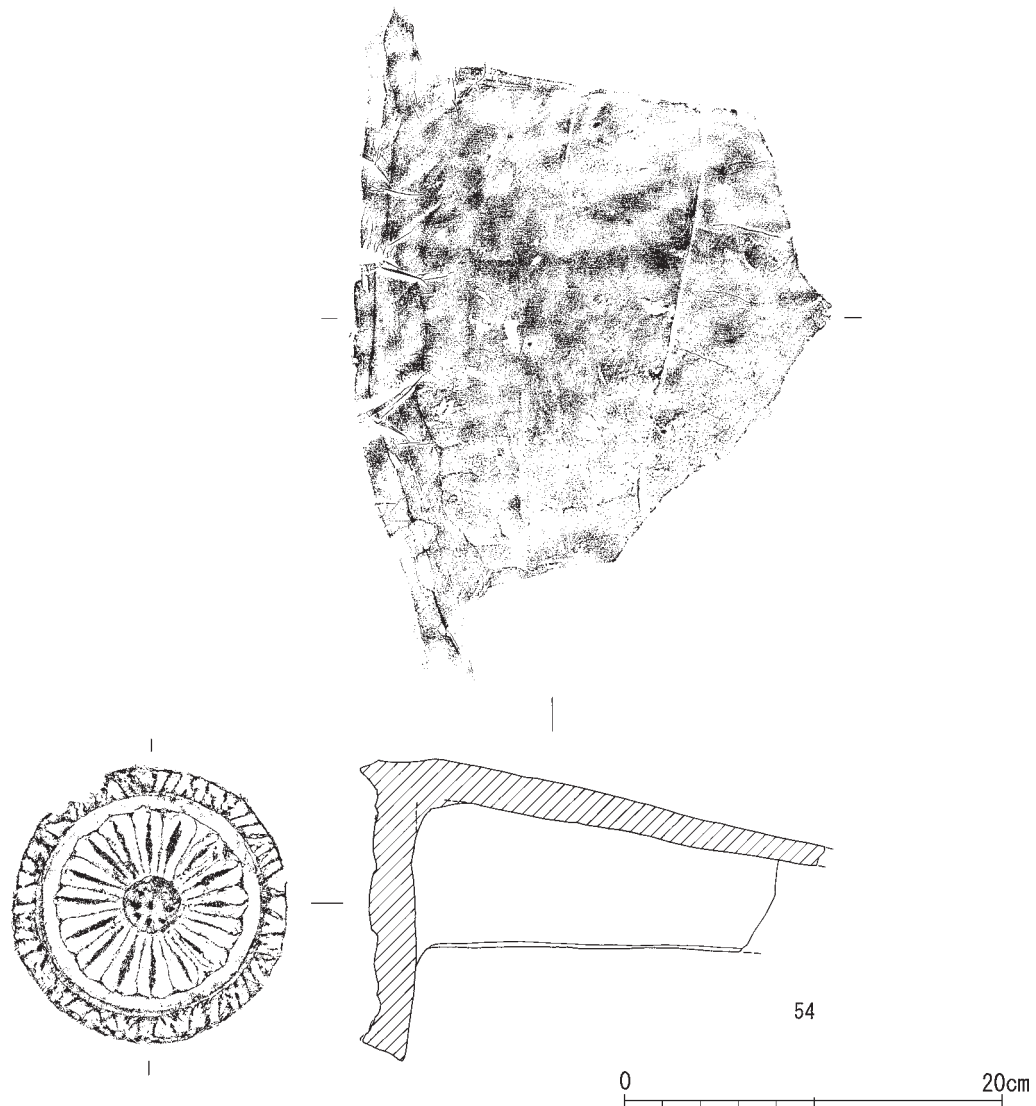


第16図 出土遺物実測図 瓦(1)

(2)瓦類(第16～26図)

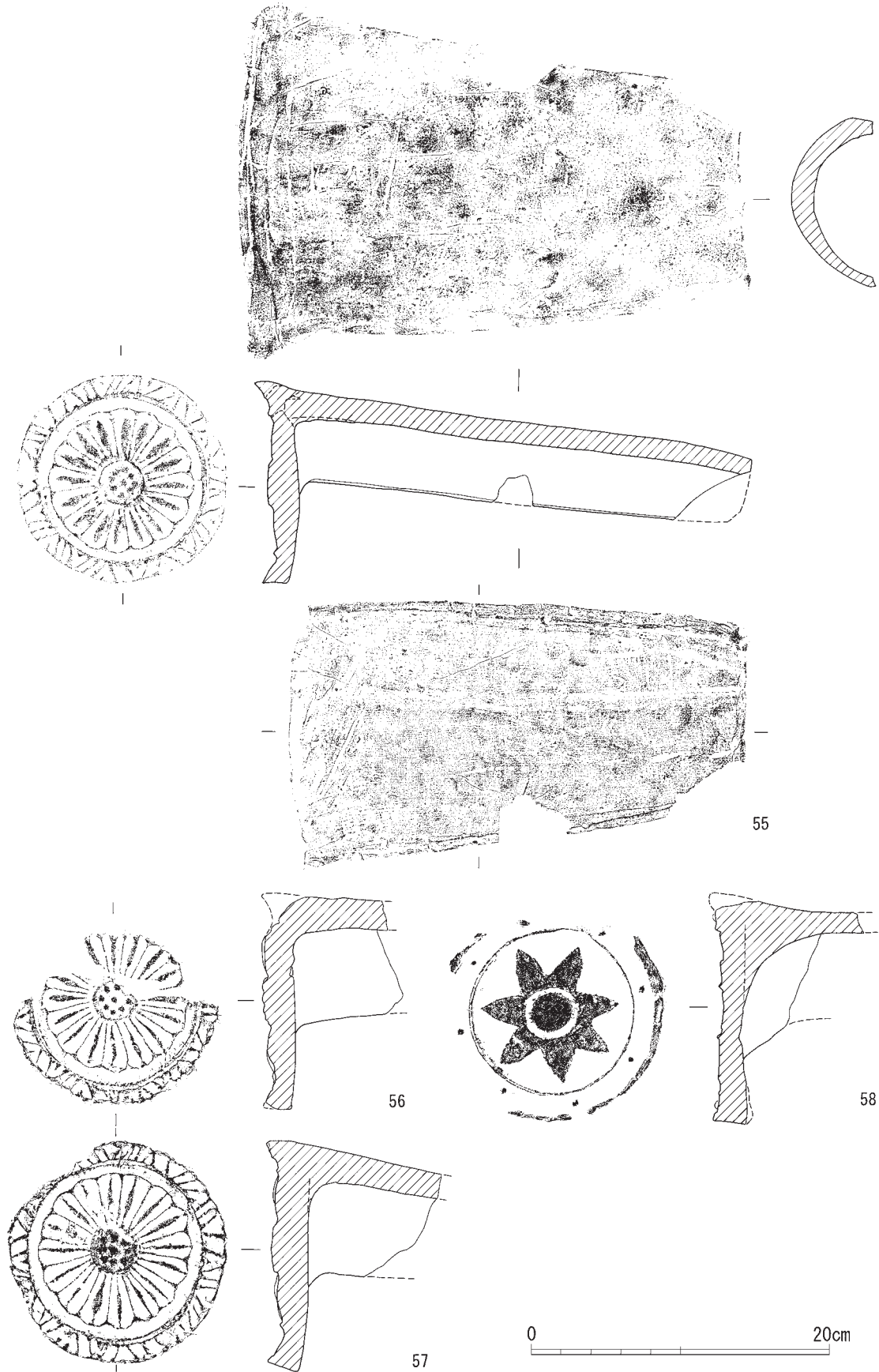
軒丸瓦・軒平瓦 48～58は軒丸瓦で、48～52はA地区、53～55はB地区、56～58はC地区から出土した。48は、軒丸瓦Ⅰ式とした複弁蓮華文で八葉の花弁をもつ軒丸瓦で、A地区の瓦堆積から出土した(第5図上)。49は、瓦堆積層から出土した。軒丸瓦Ⅱ式とした七葉の花弁をもつ軒丸瓦である。50は、南側で検出した礎敷き遺構の上面から出土した(第5図右下)。瓦当面の磨滅が著しい。51は、瓦堆積から出土した。52は、48に近接して出土している(第5図上)。48・52が出土した地点は瓦堆積の範囲の南側の出土量が比較的少ない地点である。53は、B地区の瓦堆積から出土した。瓦当面の花弁部分に5mm程の石がみえる。54・55は、瓦堆積の東側で検出した護岸施設の杭列のさらに東側で、平瓦2点とともに出土した(第9図)。55は、瓦当に丸瓦がつく完全に近い状態で出土した。外面は、タタキののち調整痕をナデ消されており、内面は布目痕が残る。56～58は、C地区の瓦堆積から出土した(第11図)。58は、北側で唯一出土した軒丸瓦Ⅱ式である。

軒丸瓦は、2種類の瓦当の文様があり、軒丸瓦Ⅰ式(48・49・53～57)は、これまで発見されて

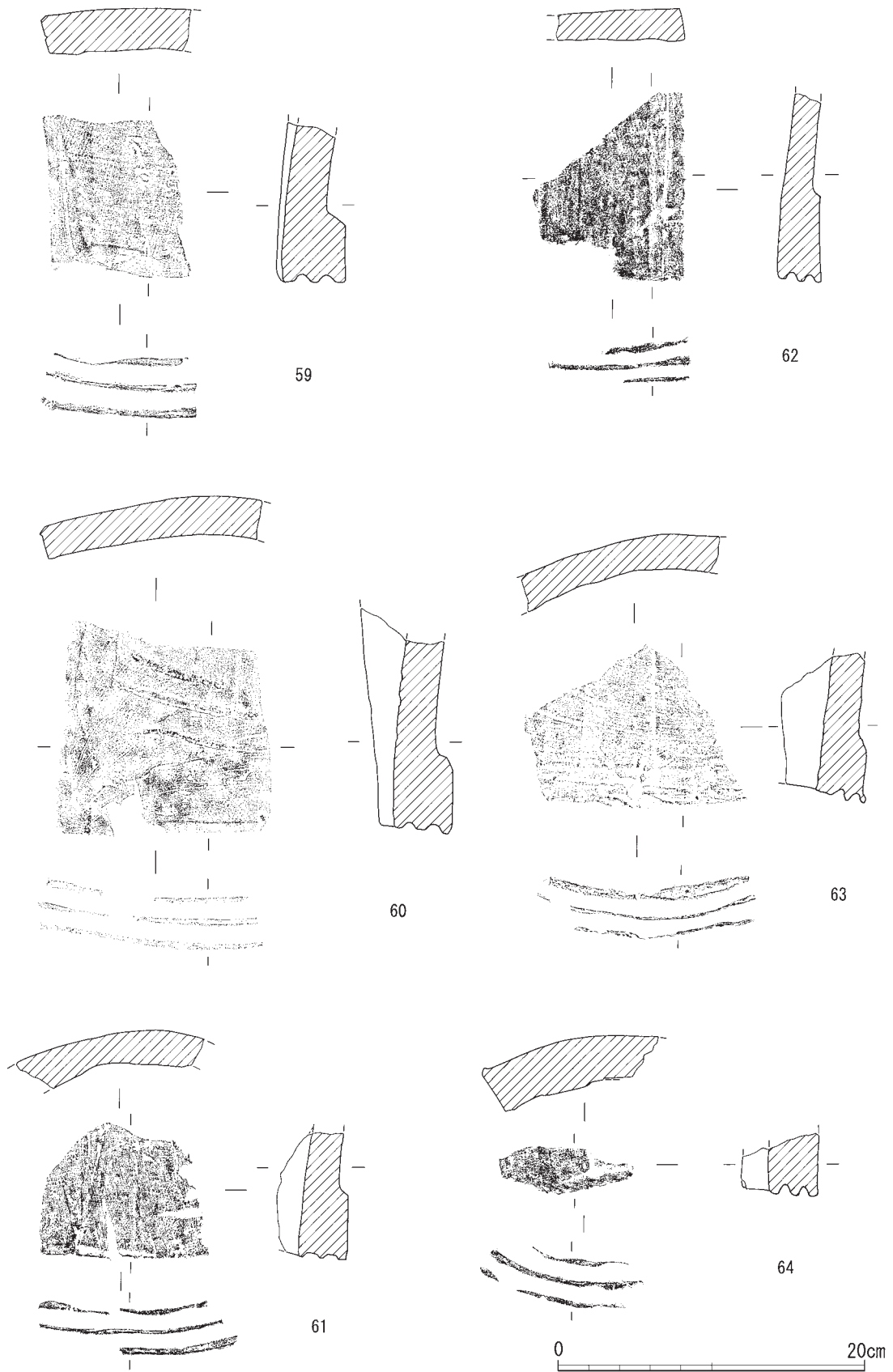


第17図 出土遺物実測図 瓦(2)

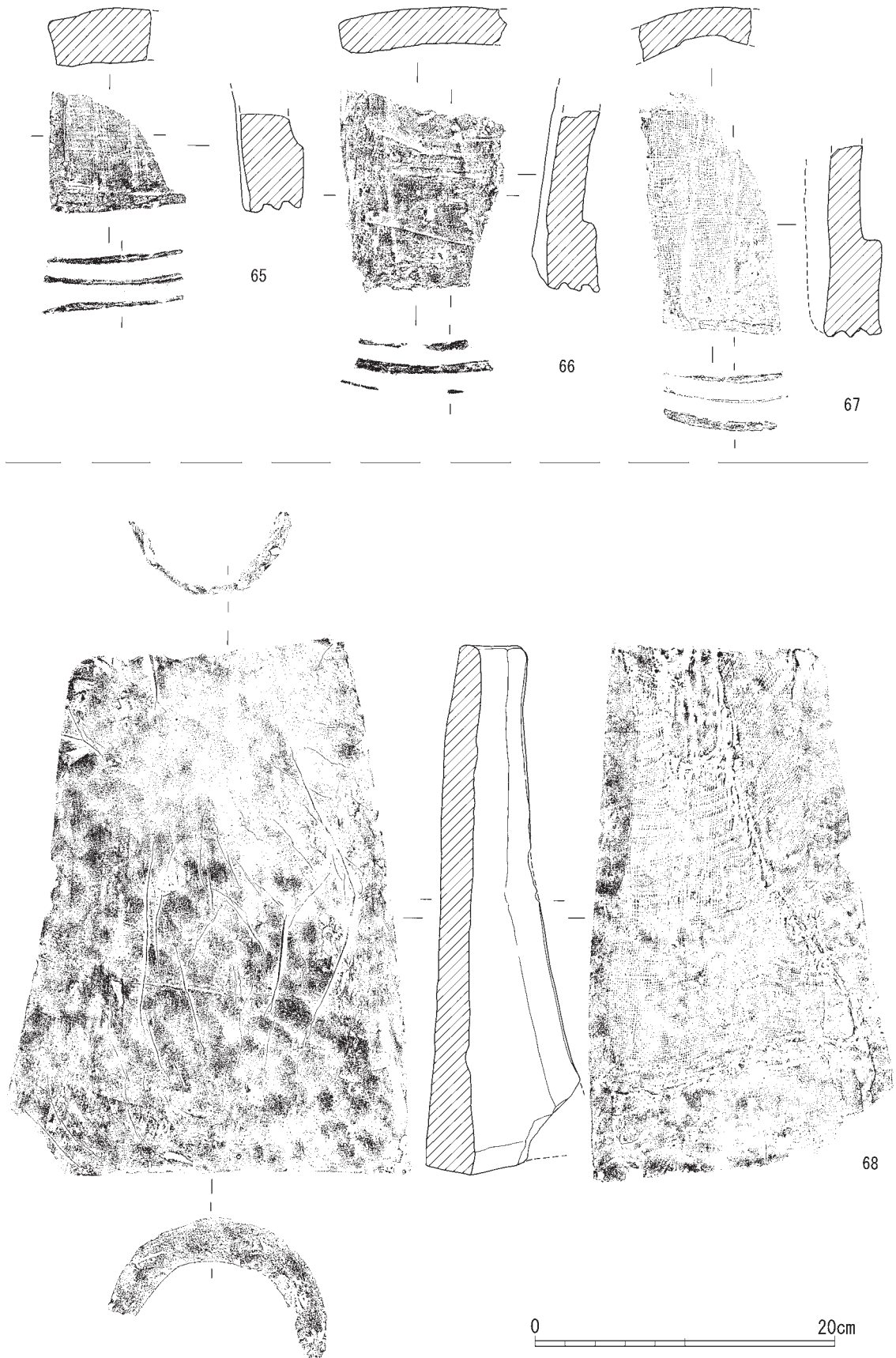
いる軒丸瓦と同範のものである。瓦当の直径は14.6cmを測る。瓦当の文様は、複弁で八葉の花弁をもち、周縁に3本一組で交互に向きを変える変形した鋸歯文があり、川原寺式の系統と考えられる。瓦当の文様は複雑であるが、花弁の稜線や調整などは雑で、胎土にも5mm程の石が混じっている。瓦当の貼り付けに関しても花弁の位置が個々に異なる。また、焼成も須恵質に近い良く焼かれたものから乳白色の焼きが甘いものまでである。もう一方の軒丸瓦Ⅱ式(50~52・58)は、瓦当面の文様は素弁の七葉の花弁で周縁に鋸歯文はなく、8個の珠文があり、軒丸瓦Ⅰ式(複弁蓮華文)とは別の系統のものと思われる。瓦当の直径は15.1cmを測り、出土した4点の色調は、すべて乳白色に近く、焼成が甘いものである。こういった経緯で2種類の軒丸瓦が使用されたのかは不明であるが、軒丸瓦Ⅱ式(七葉の花弁)は近畿北部にも同系列のものはなく珍しいもので興味深い。59~67は軒平瓦で、59~64はA地区の瓦堆積、65~67はB地区の瓦堆積から出土した。俵野廃寺で出土する軒平瓦の文様は、重弧文である。軒平瓦に関しては、完形に近いものではなく破片が多い。瓦当面は型引きによって二本の弧線を描く。顎は、段顎型式で瓦当の厚さはそれぞれ



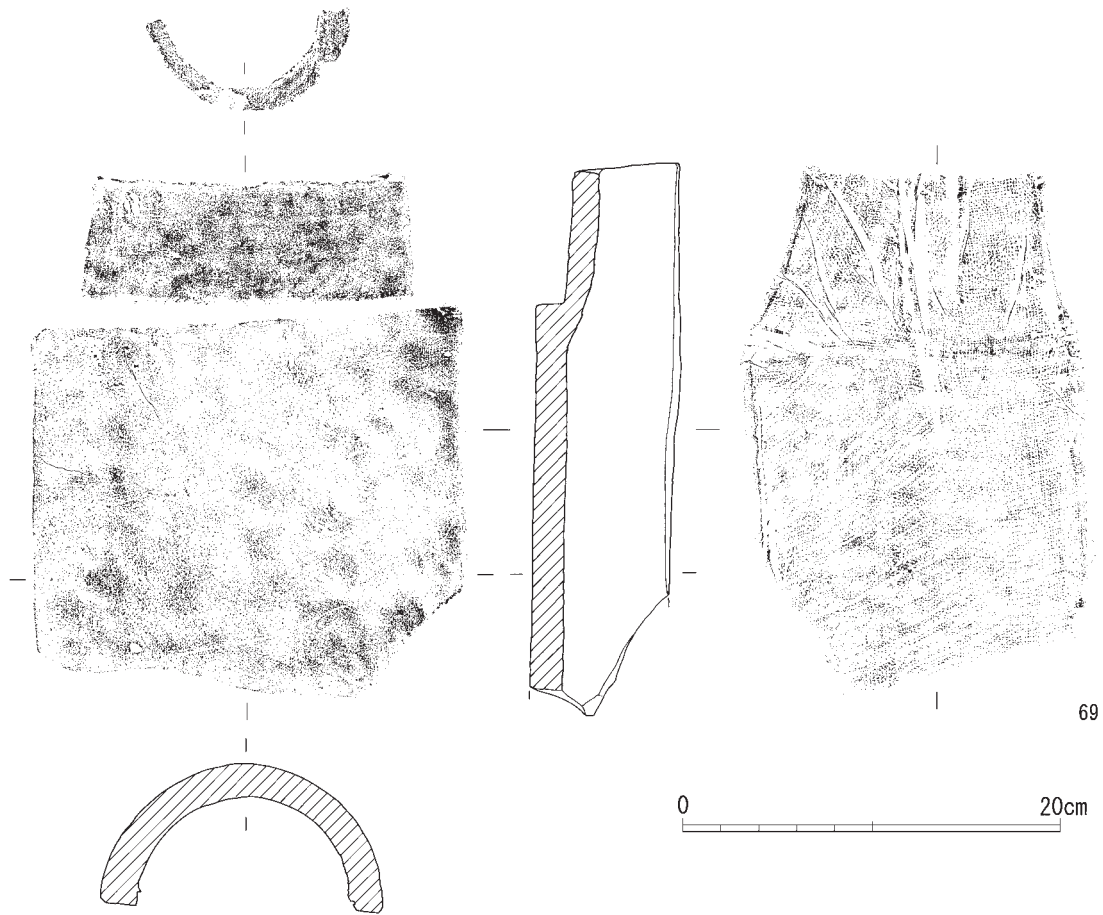
第18図 出土遺物実測図 瓦(3)



第19図 出土遺物実測図 瓦(4)



第20図 出土遺物実測図 瓦(5)



第21図 出土遺物実測図 瓦(6)

れ異なる。調整は表面には細かい布目痕や桶巻きの杵板圧痕が残る。裏面は瓦当部の粘土貼り付け痕跡やナデ消し痕がみられる。

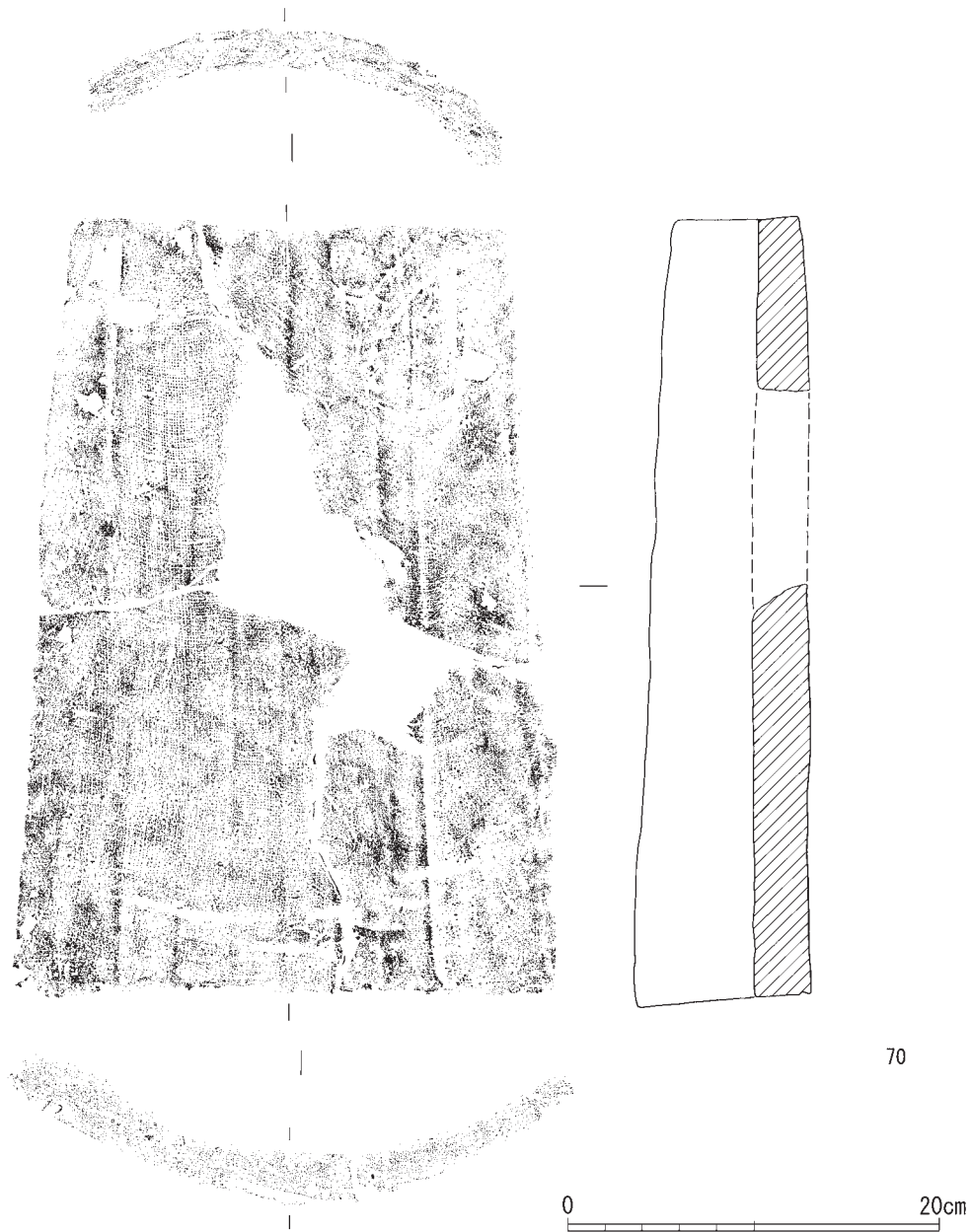
(村田和弘)

丸瓦・平瓦 出土遺物コンテナ190箱の大半は、古代の丸瓦および平瓦である。これら全てを資料化することはできないので、以下の作業により資料化に努めた。

1) 丸瓦については、隅部の総数を把握するとともに、量の少ない玉縁式瓦については全点対象とし、行基葺き式については、狭端部もしくは広端部が完存しているもの、側面16.0cm以上あるものを対象とした。それ以外に、隅部が鉤状の形状をもつもの3点を資料とした。資料総数は238点である。

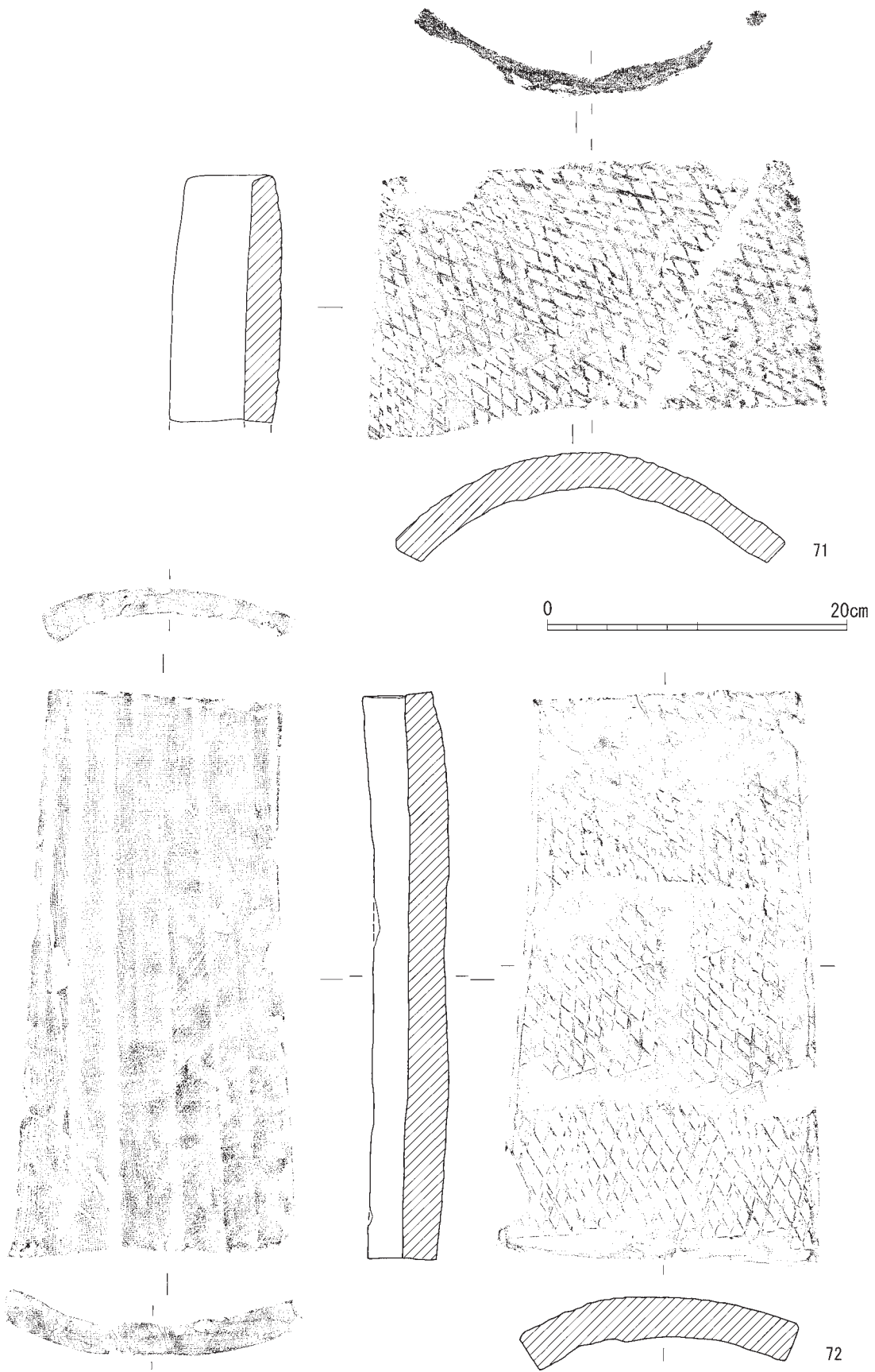
2) 平瓦については、熨斗瓦が含まれていることが予想されたので、隅部の総数を把握するとともに、狭端部12.0cm以上、広端部13.0cm以上、側面16.0cm以上を測るもの及び熨斗瓦のうち対応する両側面が残っているものを抽出した。資料総数は167点である。

3) 丸瓦、平瓦の総隅数は、それぞれ1979と696である。4で割った数は、それぞれ、495と174(いずれも小数点以下四捨五入)である。出土した丸瓦、平瓦の総数は、それぞれ495枚、174枚と想定する。丸瓦と平瓦の比率は、3対1である。

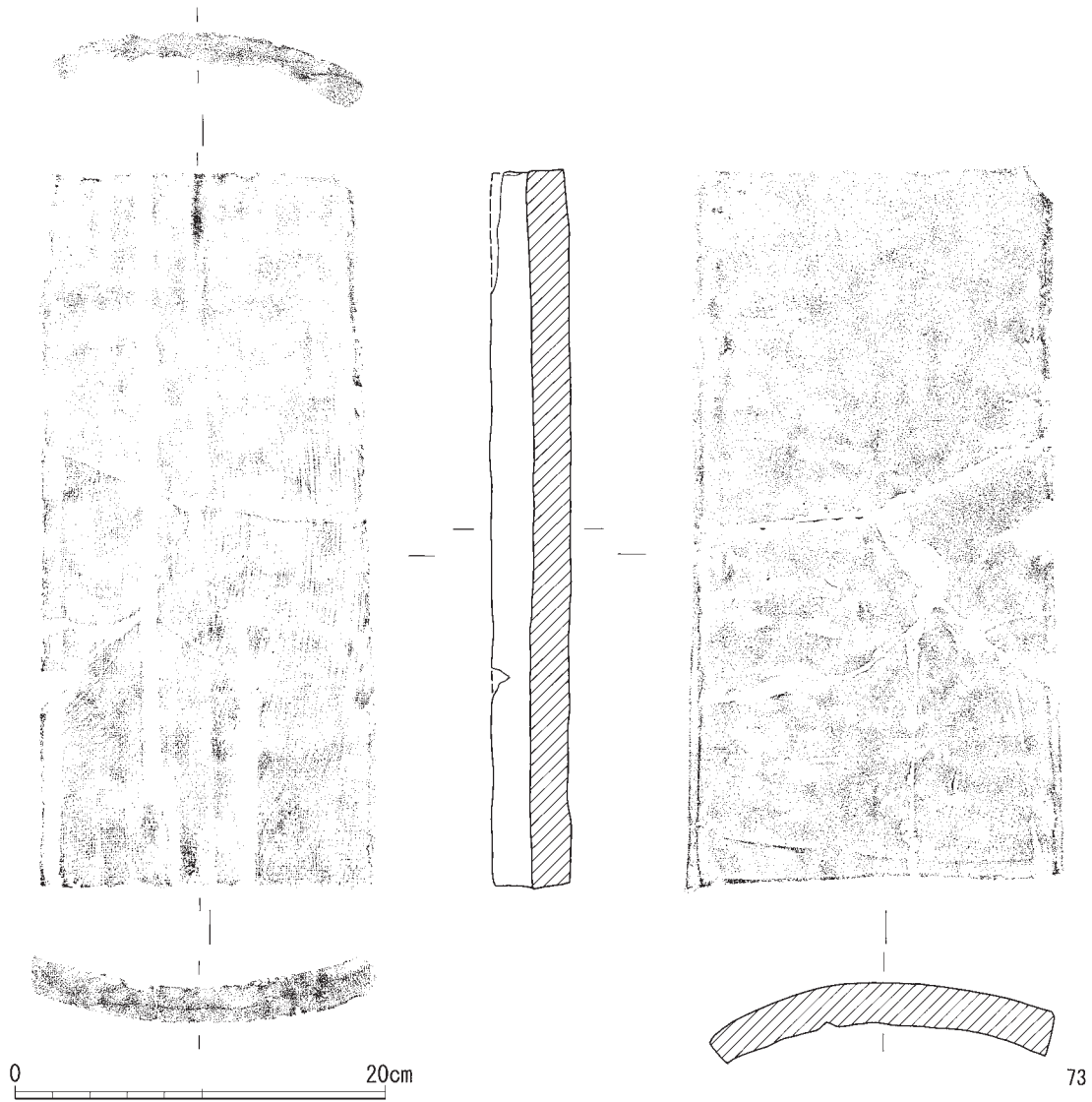


第22図 出土遺物実測図 瓦(7)

丸瓦には、行基葺き式(68)と玉縁式(69)のものがある。玉縁式のものゝ極めて少数で、総数22点を数え、総数495の約4パーセントを占めるにすぎない。玉縁式とは別に、狭端面の隅部に2cmほどの鉤状の切込みを入れるもの(第26図5)が3点ある。玉縁部の長さのわかるものは6点で、6.5~7.3cmを測り、玉縁部を除く全長のわかる瓦が1点あり、玉縁部を含む全長は42.0cmほどと復元できる。玉縁端部での模骨径は7.5~8.0cmを測る。行基葺き式の丸瓦で全長のわかるものは、68を含む4点で、それぞれ32.8cm、33.5cm、37.0cm、35.2cmを測る。復元される模骨の広端面の直径は10.5~14.6cmを、同じく狭端面の直径は5.1~8.6cmを測る。模骨には細いものから太いものまでバリエーションがある。68は太い模骨によるものである。凹面には糸切り痕および布目圧痕(6~10本/cm)が残り、円周に沿って半周長の測れる115点のうち55点に布の綴じ合わ



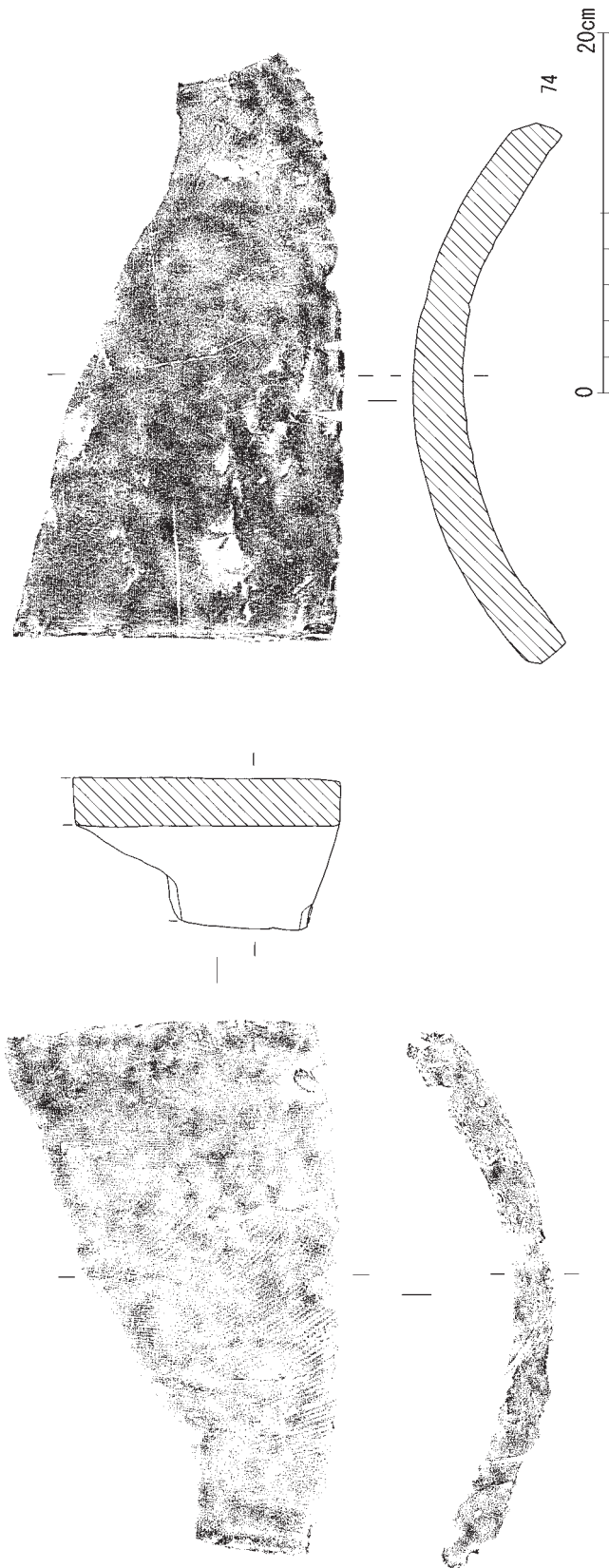
第23図 出土遺物実測図 瓦(8)



第24図 出土遺物実測図 瓦(9)

せ痕が見られる。布の綴じ合わせ痕以外に分割指標と思われる棒状の圧痕を側端部にもつものが一定量ある(第26図3)。凸面は、多くが横ナデ調整で仕上げられているが、叩き痕、削り痕が残されているものがある。叩き板圧痕は、平行叩き(第26図1)が16点、格子叩き(第26図2)が2点観察できた。横方向および縦方向の削り痕が観察できるもの、強い縦方向のナデが観察できるものもある。焼成後に中央部に釘穴を開けているものが1点ある(第26図6)。側端面に布目圧痕をもつものが1点ある(第26図4)。

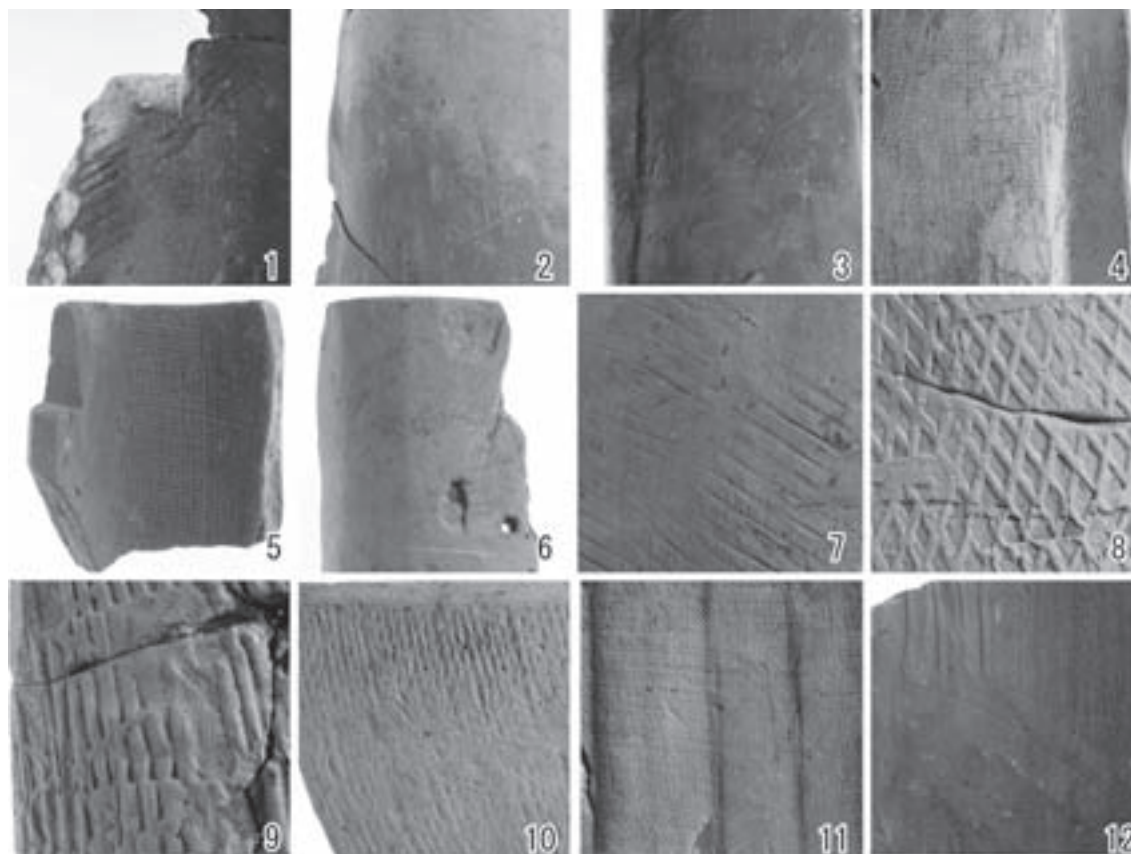
平瓦167点のうち、法量がわかるものは1点(70)のみで、全長41.5cm、広端面長29.5cm、狭端面長24.0cmを、厚さ2.0~3.5cmを測る。ほかに広端面長のわかる2資料は、28.0cm・33.0cmを、狭端面長のわかる8資料は、20.0~28.0cmまでを測る。平瓦全体での厚さは1.3~4.3cmと幅がある。平瓦は、いずれも桶巻き4枚づくりによるものと推定できる。凸面の調整は、ナデもしくはケズリ(強いナデか)痕跡のみを留めるものが大半の124点を占める。後述するようにナデの下に叩き痕を観察できるものがあるので、これらの多くは叩き締めを行った後ナデ調整等を行ったと考え



第25図 出土遺物美測図 瓦(10)

られる。叩き痕跡は平行叩き(第26図7)、斜格子叩き(第26図8)、長方形格子叩き(第26図9)、縄叩き(第26図10)がある。資料化対象外だが正格子叩きの小片も存在する。平行叩きは17点あるが、いずれもナデの下にわずかに叩き痕を残すものである。斜格子叩きは20点(71・72含む)確認できた。確認できる叩き板の模様帯の幅は、8.5cmである。^(注5)多くは叩き後不調整だが、叩きをナデ消そうとするものも少量ある。長方形格子叩き、縄叩きはそれぞれ2点確認できた。このほか、叩きの種類が判別できないものが1点ある。凹面には、布目痕、布綴じ痕、糸切り痕及び枳板圧痕などが観察できる。分割指標は見られない。布目は、7~10本/cmのものが大半だが、5~6本/cmの粗いものや、11~16/cmの細かいものもある。布の綴じ合わせ痕は、22点に認められた。凹面にケズリを行うもの(第26図12)も少量ある。枳板の幅は、幅2~4cmを測るもの(第26図11)が多い。両端面および両側面の整形は、ヘラ切りのみ行っているものが多いが、ヘラ切り後両端面や両側面の角を面取りするもの(74)が一定量存在する。

平瓦の中には熨斗瓦とわかるものが19点存在する。熨斗瓦のうち、全形のわかるものは、72・73を含む4点である。全長は37.0~



第26図 丸瓦・平瓦部分写真

38.5cmを測る。この内3点は桶巻き後6分割されたものと推定され、広端面長17.0~19.0cm、狭端面長15.5~17.5cmを測る。残りの1点は、広端面13.5cm、狭端面10.0cmを測る。厚さは薄い部分1.5cm前後、厚い部分で2.6cmを測るものが多く、桶巻き4枚作りの平瓦に比べて薄い傾向にある。

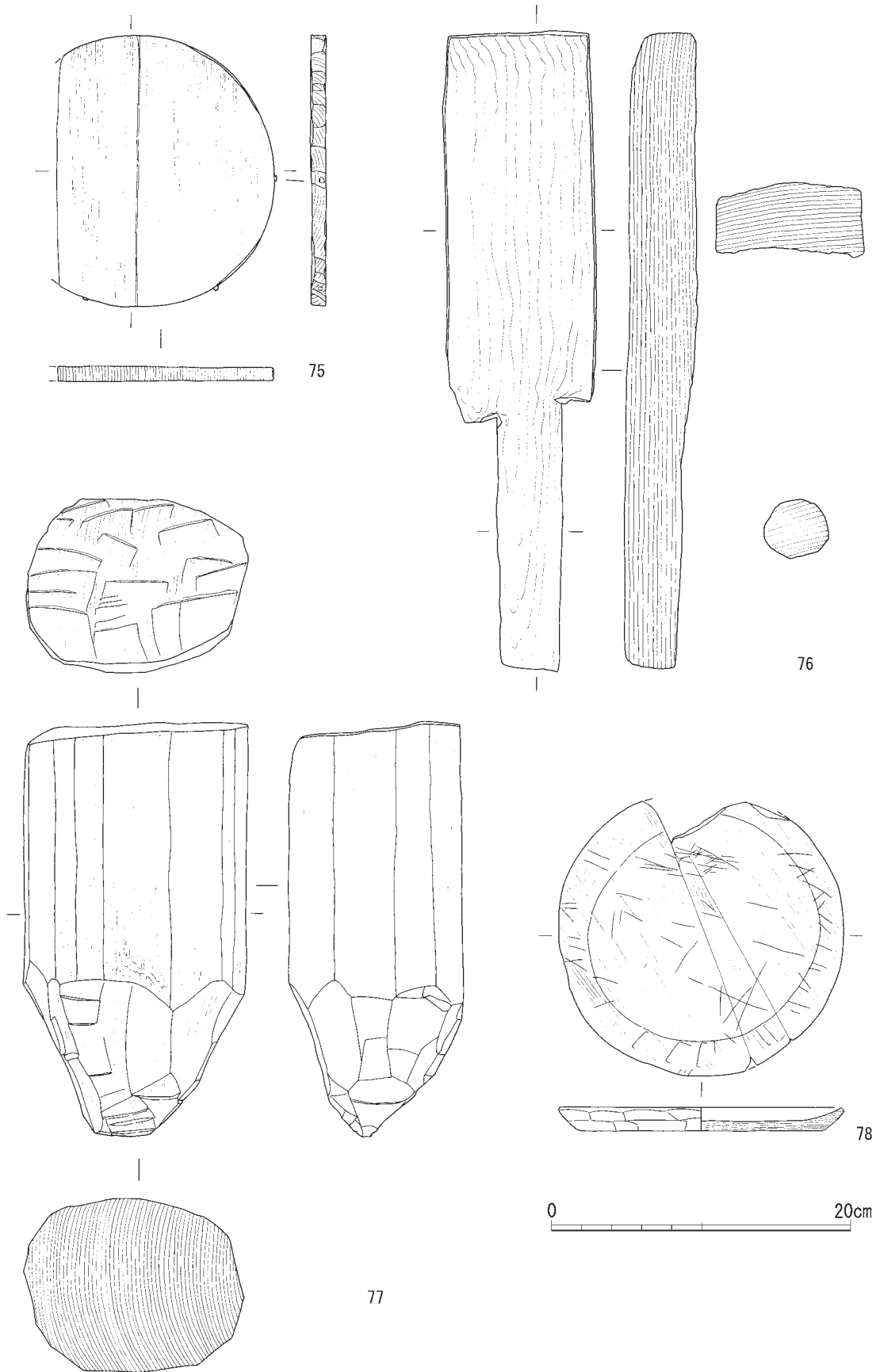
今回の調査では出土地による平瓦・丸瓦の差異を見出すにはいたらなかった。図化した瓦では、68・70がA地区、71~73がB地区、69・74がC地区からそれぞれ出土した。

(肥後弘幸)

(3)木製品(第27図)

75・76は、B地区で出土した。75は、瓦堆積と護岸施設との間の地点で出土した曲物の桶の底板で4か所に2~3mm程度の柄穴があげられ、木釘が差し込まれている。76は、瓦堆積層の下部から出土した。全長42cmを測り、羽子板状を呈している。握り部は加工されているもので全体に加工が雑であり、何らかの未製品の可能性がある。77・78は、C地区から出土した。77は、瓦堆積層から出土した杭状の木製品で、一方を削り杭の先のように尖らせているが、用途は不明である。78は、南北溝から出土した木製の皿である。内外面は、丁寧に削り整形されている。いずれも針葉樹と考えられる。

6. まとめ



第27図 出土遺物実測図 木製品

今回の第2・3次調査では、礎石や基壇など建物に直接関連する遺構は検出できなかった。しかしながら、A・B地区において、瓦などの遺物が多量に堆積している状況を検出し、A地区の南側で礫敷き遺構を検出した。また、C地区では寺域の東端部の状況を確認した。

A・B地区で検出した瓦堆積内からは、寺院の存続時期を示すものとして飛鳥時代後期から奈良時代後半(7世紀後半～8世紀後半)に属する瓦や土器のほかに、平安時代(10世紀代)の土器が出土した。平安時代の土器は少量であるが、瓦堆積層の上部および上面から出土している。また、瓦堆積の中には、柱材や多量の木片が出土した。これらの状況から、この堆積は自然堆積ではなく、平安時代に建物の解体あるいは廃絶後の片付けがあったことが推測できる。この瓦堆積は、護岸施設の杭列と南北の溝の埋土の上に堆積しており、護岸施設が設けられる時期と瓦堆積の時期との正確な時期差は不明であるが、護岸施設や南北溝が瓦堆積より古い時期に設けられたものであることがわかった。

遺物は、おもに瓦堆積から出土した土器と瓦などである。瓦では、軒丸瓦・軒平瓦(重弧文)・丸瓦・平瓦・熨斗瓦がある。軒丸瓦では、従来から知られている複弁蓮華文軒丸瓦(軒丸瓦Ⅰ式)のほかに、新たな型式として7葉の花弁を持つ軒丸瓦(軒丸瓦Ⅱ式)が出土した。軒丸瓦Ⅱ式とした瓦の特徴としては、出土量は軒丸瓦Ⅰ式に比べると少なく、花弁の形が不揃いで粗雑なものであるにもかかわらず、瓦当の残存率が高い。製作に時期差がある可能性も考えられるが、瓦堆積層から出土しているため時期差を確認することは難しい。さらに、出土した地点がC地区の北端部とA地区南側と瓦堆積の南北端のみで、遺跡範囲の南北端から出土していることなど出土状況にも特徴がみられる。丸瓦では、段を持たず一方が細くなる行基葺き式のものが採用されている。玉縁式のものや格子叩きをもつものは補修瓦として持ち込まれたものであろう。平瓦は、凸面の叩きを丁寧にナデ消したものが大半を占める。これが創建時の瓦であろう。斜格子叩きをもつものが一定量あり、別の建物に用いられた可能性がある。そのほかの叩きをもつものは補修瓦であろう。調整方法から考えると、時期としては8世紀初頭(斜格子叩き)～8世紀後半(縄叩き)にかけて瓦の葺き替えもしくは一部補修が実施されたと見られる。今回の調査で出土した瓦を種類別に比較すると丸瓦が多く平瓦が少なく、比率的にはおよそ3対1となる。丸瓦が多い建物を想定すると築地などが想定されるが、今回の調査では確定できる遺構などは確認できなかった。土器では、7世紀末～8世紀初頭の須恵器の杯や土師器の杯など、ほかに10世紀前半の須恵器の杯などが出土した。平安時代に建物の廃絶または倒壊があったか、この時期に瓦や建築部材の片付けが行われたと考えられる。

今回の調査では、礎石や基壇など建物に直接関連する遺構は検出できなかったが、2種類の型式の軒丸瓦が出土したことにより、塔以外に瓦葺きの建物が存在していた可能性が高くなった。また、複弁蓮華文軒丸瓦のほかに、今回出土した型式の軒丸瓦(軒丸瓦Ⅱ式)は、瓦当面の花弁が7葉で非対称の文様の簡略化されたものである。出土した遺物から平安時代に廃絶または解体が行われたと考えられ、俵野廃寺で出土した2種類の軒丸瓦が同時期に葺かれていたと思われるが、瓦製作に時期差があるのかは現時点では確定することはできない状況である。しかしながら、こ

これらの瓦は当時の丹後地域における瓦生産技術を知るうえで貴重な資料といえる。

A地区の瓦堆積は、塔の心礎と思われる礎石が発見された地点に近接していたが、そのほかの礎石や基壇の痕跡を確認することはできなかった。調査区の東側には南北溝や護岸施設があり、さらに東には俵野川の旧流路があるため、東に遺構が展開する可能性は低い。西側では現俵野川の川底で、塔の心礎と思われる礎石が発見されている。発見された地点とA地区までの距離は、約8mしか離れておらず、この礎石が元の位置を保っていたとすれば、西側の丘陵との位置関係から考えると、旧河川と丘陵に挟まれた狭い範囲に寺院が造られていたと推測される。また、一方では、伽藍配置を無視し丘陵の平坦部を利用した建物の配置をしていた可能性も考えられる。

A地区の南側で検出した礫敷き遺構は、5～10cmほどの大きさの礫が広範囲において敷き詰められており、広場的な空間の存在が想定される。

近隣の「木津」の地名が示すように、古代港湾という要所に建てられた俵野廃寺は、奈良時代に丹後国分寺(宮津市)が建立されるまでは、丹後唯一の古代寺院として、独自の2種類の軒丸瓦を葺いた伽藍が威容を誇っていたと推察できる。寺院の建物配置や西側の状況、瓦の供給元については、将来の周辺の調査で確認されることを期待したい。

(村田和弘・肥後弘幸)

注1 村田和弘「俵野廃寺発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第122冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2007

注2 調査参加者(順不同)井上由起子・井本祐子・吉岡千代美・松本彬成・小路すみ子・橋本正一・岡本稔・松本泰隆・松本隆夫・西垣憲志・畠中滋作・山本三市郎・中川直・嶽繁之・小笠原順子・清水友佳子・丸谷はま子・寺尾貴美子・長尾美恵子・山川幸乃・田中ゆかり・槻啓宏
指導いただいた方・機関(敬称略)京都府教育委員会・京丹後市教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・上原真人・菱田哲郎

注3 網野町誌編纂委員会「第二章古代」(『網野町誌』上巻)1992

注4 「網野町の遺跡」(『京都府網野町文化財調査報告』第4集 網野町教育委員会)1986

注5 よく似た斜格子叩きの瓦を焼成する堤谷瓦窯(8世紀初頭)が同市久美浜町丸山に所在する。しかし、ここの斜格子叩き板の文様幅は7.5cmであり、俵野廃寺のものとは異なる。

参考文献

岡田茂弘「丹後俵野廃寺」(『貝塚』77号 物質文化研究会)1958

林和広「俵野廃寺出土の古瓦」(『太邇波考古』第3号 両丹技師の会)1983

小山元孝・橋本勝行「俵野廃寺の鬼瓦」(『太邇波考古』第23号 両丹技師の会)2005

菱田哲郎「丹後地域の古代寺院」(『丹後地域史へのいざない』 思文閣出版)2007

圖 版



(1) 調査地遠景（南上空から）



(2) B地区瓦堆積検出状況（北東から）



(1) 調査地近景（北から）



(2) A地区全景（北から）



(3) A地区瓦堆積検出作業風景（北から）



(1) A地区瓦堆積南側遺物出土状況
(北から)



(2) A地区瓦堆積南側軒丸瓦(48)
出土状況(北東から)



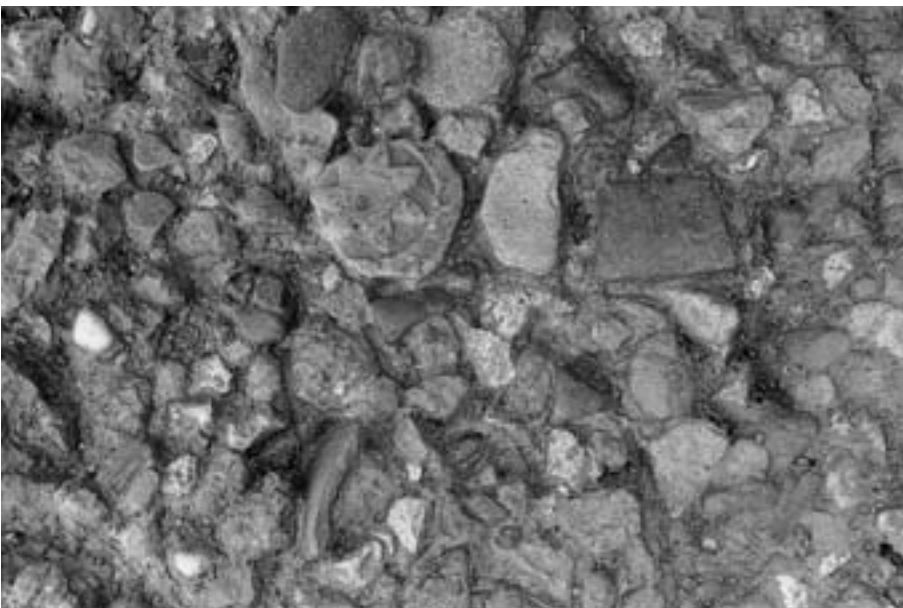
(3) A地区瓦堆積南側軒丸瓦(52)
出土状況(北東から)



(1) A地区礫敷き遺構全景(北から)



(2) A地区礫敷き遺構検出作業風景
(北西から)

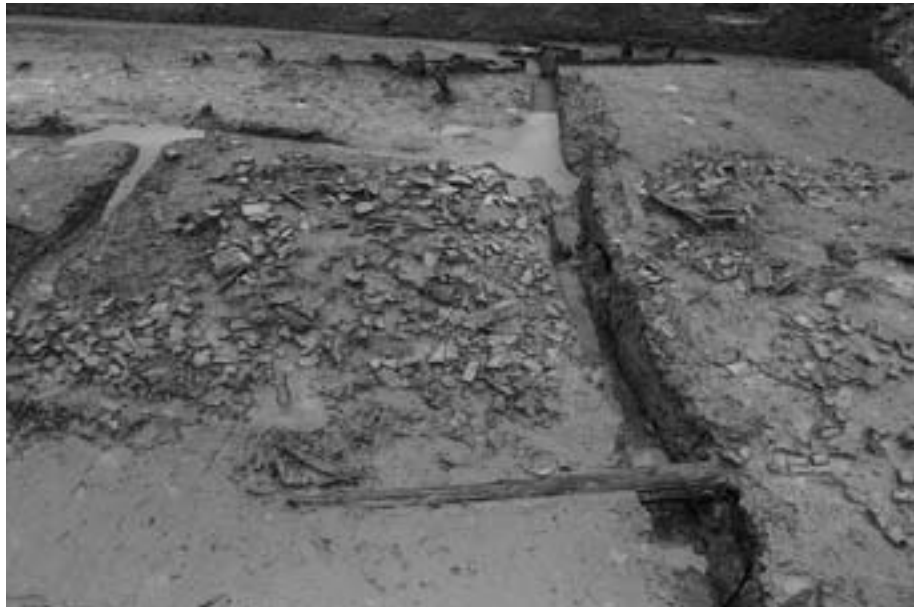


(3) A地区礫敷き遺構軒丸瓦(50)
出土状況(東から)

(1) B地区全景（北から）



(2) B地区瓦堆積南側検出状況
（西から）



(3) B地区瓦堆積北側検出状況
（西から）





(1) B地区東側軒丸瓦(54・55)
・平瓦出土状況(西から)



(2) B地区護岸施設検出状況
(南西から)



(3) B地区護岸施設検出状況
(南西から)



(1) 現地説明会風景（北東から）



(2) C地区全景（南西から）



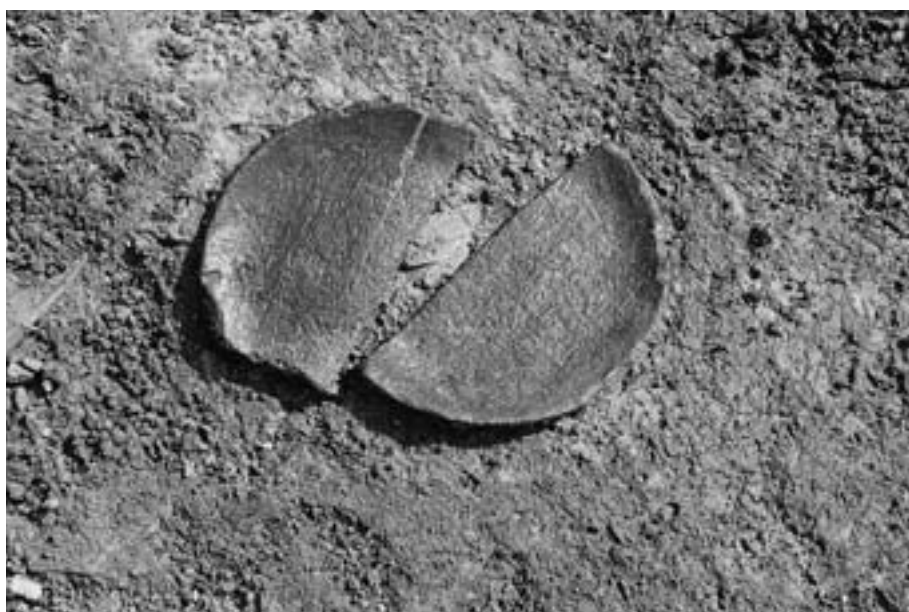
(3) C地区護岸施設検出状況
（南から）



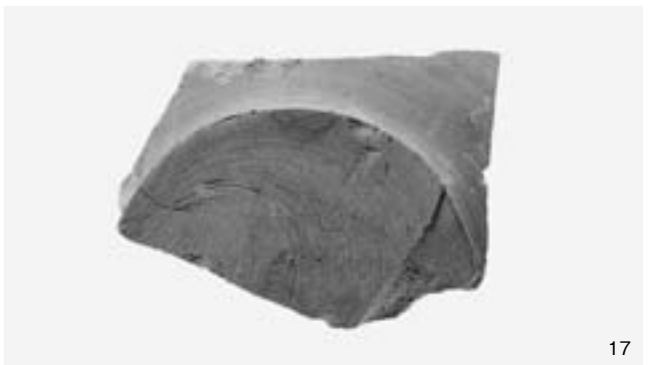
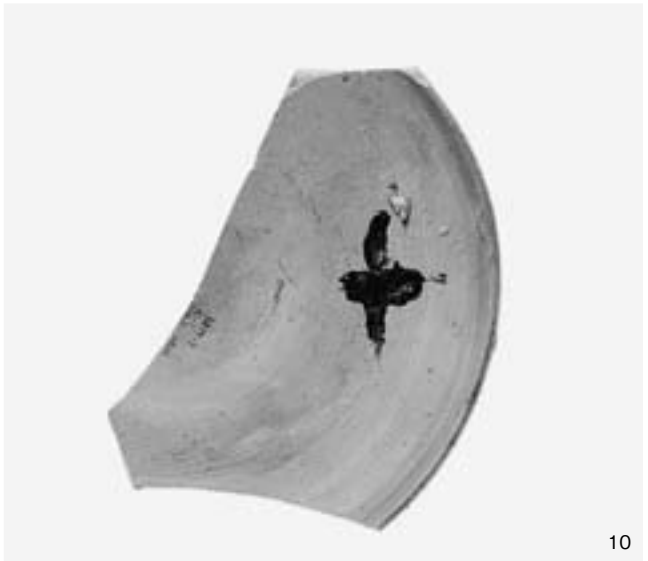
(1) C地区軒丸瓦(58)出土状況
(西から)



(2) C地区軒丸瓦(57)・丸瓦(69)
出土状況(西から)



(3) C地区南北溝内木製品(78)
出土状況(北東から)







49



49



52



52



53



53



54



55



55



55



57



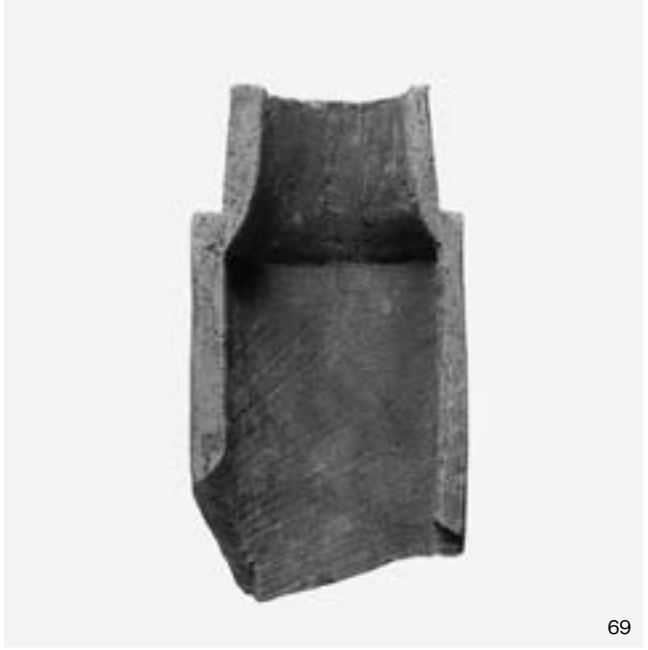
58



出土遺物 瓦 (3)



69



69



72



72

出土遺物 瓦 (4)



73



73



70



70

出土遺物 瓦 (5)



75



77



76



77



78



78

所収遺跡名	要 約
俵野廃寺第2・3次	飛鳥時代創建の古代寺院跡で、礫敷き遺構・瓦堆積のほか、寺域東を限るとみられる杭や板で護岸された溝などを確認した。出土遺物から、寺院は平安時代中期に廃絶したと推定される。
戸田遺跡	由良川左岸に近接する12世紀後半に成立した集落遺跡。養和元（1181）年頃までには立荘されていた松尾社領雀部庄関係文書に記された「富田」「とた」の一部にあたと推定される。
新庄遺跡第5次	亀岡盆地北端に位置する縄文～鎌倉時代の複合集落遺跡。古墳～平安時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡のほか、周囲を堀で囲まれた大社造りに復元できる鎌倉時代の掘立柱建物跡が検出された。
長岡京跡左京第527次	桂川と小畑川の合流点付近にあたり、中世～近世と推定される溝のほかには、顕著な遺構は検出されなかった。

京都府遺跡調査報告集 第132冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141